

駒場

1998

東京大学大学院総合文化研究科  
東京大学教養学部



KOMABA 1998 SUPPLEMENT

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES  
THE UNIVERSITY OF TOKYO. KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES  
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 1998  
SUPPLEMENT

表紙について

赤絵式ヒュドリア

高さ：21cm 胴部径：8.3cm  
紀元前350年頃

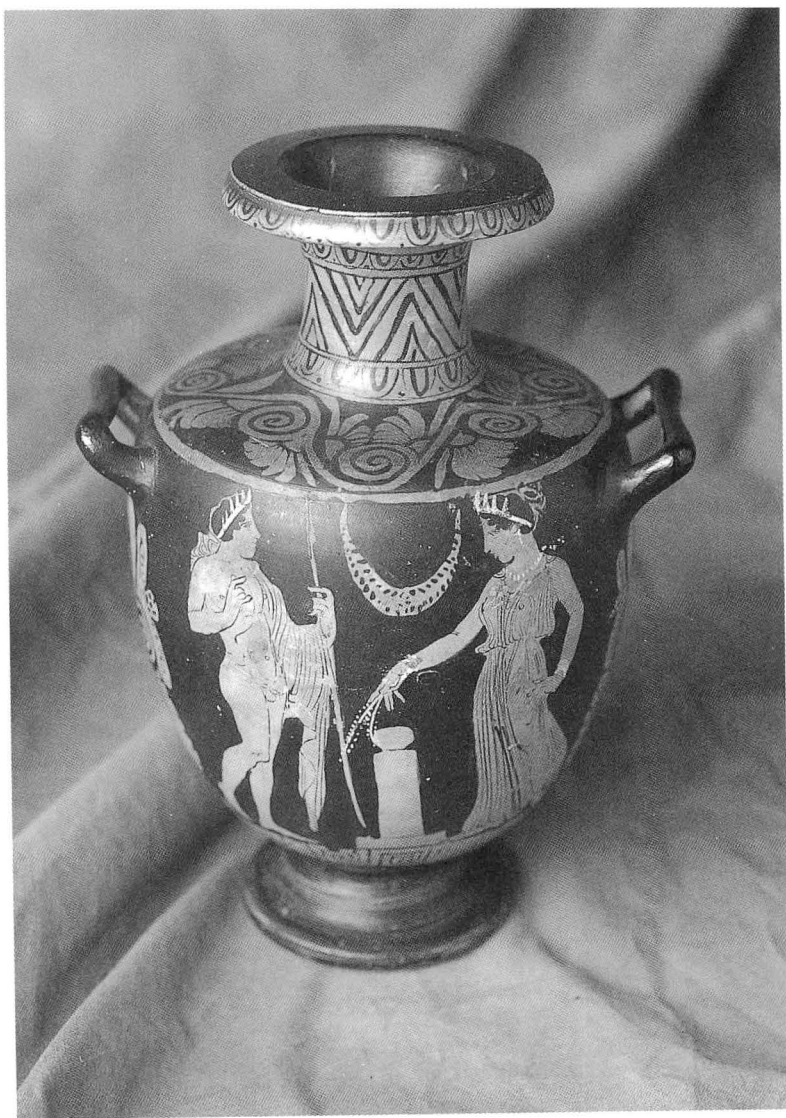
この赤絵式ヒュドリアは、南イタリア、カンパニア地方にあったギリシアの植民都市で製造された陶器である。紀元前5世紀前半まではアテナイを中心に作られたアッティカ陶器がさかんに製造され、地中海沿岸の各植民都市に輸出されていたが、紀元前5世紀末になるとこれらの都市の繁栄にともない陶器の製造も開始された。南イタリアのこれらの都市における陶器ははじめアテナイの陶工たちが指導したため、アテナイ風の陶器が作られたが、しだいに南イタリアの作風ができあがっていった。南イタリアのギリシア陶器の研究者であるオーストラリアのA.D.トレンドール氏の研究によれば、ルカニア、アブリア、カンパニア、パエストゥム、シチリアの五つの流派に分類されている。(A.D.Trendall, *The Red-Figured Vases of Lukania Campania and Sicily I,II*, Oxford Monographs on Classical Archaeology, 1967,Oxford)

このヒュドリアはトレンドール氏の分類に従えば、カンパニア派に属する“パーリッシュの画家”によって制作された陶器である。赤絵式という呼び方は赤像式ともいい、陶器の赤い地肌を像として残し、その他の部分を黒く塗ってしまう絵付けの方法で、南イタリアで作られた陶器の多くがこの方法で作られている。ヒュドリアは水瓶のことである。この写真には左右に二つの把手が見えるが、実は正面の向こう側にもう一つの把手が縦についていてその把手をもって水を別の瓶にあげたりできるようになっている。また、その把手は紐をかけたり、頭の上に載せたときのバランスを崩さないように押さえたり、水を安全に運べるような機能としても使用されていた。絵の主題については「アガメネムノンの墓におけるエレクトラとオレステス」を表したものと解釈することもできるようであるが、明らかではない。

美術博物館の所蔵品の中には、この他にギリシアやキプロスの陶器が数点ある。美術博物館の発足した昭和20年代には、東洋考古学の三上次男教授や西洋古典学の呉茂一教授が委員をされていたこともあって、このような資料が蒐集されたものであろう。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES  
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 1998  
SUPPLEMENT



東京大学大学院総合文化研究科  
東京大学教養学部

## まえがき

東京大学教養学部は、戦後の学制改革によって新制の東京大学が誕生して以来、全国でもユニークな「教養学部」として50年の歴史を誇っている。また、1993年（平成5年）に開始された大学院重点化によって現在の形に整備された大学院総合文化研究科は、7専攻・系にわたる修士課程・博士課程の大学院教育を担当しつつ、東京大学の前期課程学生7,500人の教育に責任を持つ部局であり、さらに、3・4年生を対象とする独自の後期課程を持っている。

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部とは、いわゆる三層、すなわち、学部前期課程、後期課程、大学院にわたる教育と研究をおこなう大規模な組織であり、大学院レベルの高度な研究の成果が前期課程の教育にフィードバックされる柔軟な仕組みをとっている。その教育レベルの高さ・緻密さは、国内はもとより国際的にもきわめて高い評価を得ている。

こうした駒場の教育・研究活動をくわしく紹介する書物が、年報〔駒場〕である。この年報は1992年（平成4年）に創刊されて以来8冊目となるが、大学院総合文化研究科・教養学部の自己点検、自己評価の書としてのねらいを果たしてきたと言えるだろう。

本書は、昨年刊行された〔駒場〕1997のSUPPLEMENTであり、1998年（平成10年）度の学部の最新の動向を紹介している。

1992年の本書の創刊号の編集責任者は、蓮實重彦現東京大学総長であった。その巻のまえがきで、蓮實先生は、現代の大学のあるべき姿を、閉じたところにある高み（象牙の塔）ではなく、「開かれた濃密さ」と表現している。知と価値を社会に向けて放射しながら、いつまでもエネルギーを失わない多様な営みとしての大学。本書はそのような多様な営みのひとつであるとともに、その営みのあたうるかぎりのすべてを放射しようという試みでもある。

多くの方々から支援、アドバイス、そして批判をお寄せくださるようお願いしたい。

教育・研究評価委員会

---

# I

1998年における  
総合文化研究科・教養学部

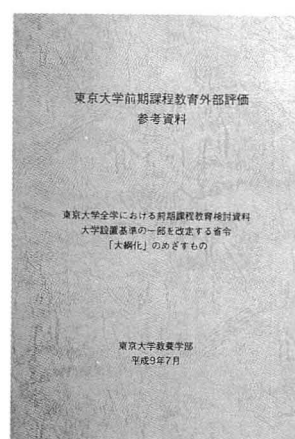
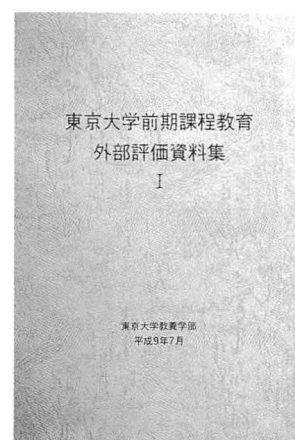
# 1 前期課程教育外部評価について

東京大学教養学部は、東京大学全学の前期課程教育に責任をもつ部局として、1949年（昭和24年）の発足以来、一貫してリベラル・アーツ教育を行ってきた。1992年（平成5年）には、教養学部は、前期課程教育カリキュラムの全面的改革と、その教育を担う組織改革を断行した。

駒場キャンパスでは、教養学部設立以来、前期課程、後期課程、大学院のいわゆる「三層構造」が有機的に一体化して教育・研究に従事してきたが、1992年の改革はこの体制をさらに強化するものとなった。総合文化研究科・教養学部の基本戦略は、大学院重点化にともなう教育体制と教官組織の改変を織り込みつつ、大学院、後期課程、前期課程の各レベルに組織的な一貫性をもたせ、大学院における教育・研究の成果を恒常的に学部前期課程・後期課程教育の活性化と充実に還元する体制を構築することであった。この改革によって、教養学部が長年果たしてきた機能は、大学院総合文化研究科に引き継がれ、この研究科は東京大学全学の学部前期課程教育の運営に全面的に責任をもつ部局として以前にもまして重要な位置を占めることになった。このカリキュラムの大改革と並行して、進学振分け制度にも大きな変更が加えられた。

これらの改革は新制大学発足以来の抜本的なものであり、それ自体の有効性について全く未知の部分を抱えていた。すなわち、現代にふさわしい前期課程教育を大学院重点化された組織がいかに担当するかという命題を包含していた。そのため、評価・点検は必然的に新カリキュラムの枠組みと、一新された組織によって前期課程教育を担当するための体制という二つの面にわたることとなり、また、この新しい理念が東京大学の教育システム全体の中で良好に機能しうるかどうかも十分な年月をかけて評価・検証し、長期的展望に立って改善をする必要があった。

総合文化研究科・教養学部では、新しく実施したカリキュラムについて1992年以来毎年、自己点検・評価を行い、その結果を公表してきた。また、1997年には新しい進学振分け制度下での学生の動向や履修状況を分析した。上記の自己点検・評価資料を基に、1998年からは、教養学部を含む後期課程諸学部の教官による点検・評価を、さらに東京大学外の有識者による評価を実施した。



## 1. カリキュラム改革の背景と概要

カリキュラム改革に至るまでの経緯やその内容については、すでに幾つかの報告書（『駒場199x』および『教育・研究評価報告書』）等で言及してきたので、ここでは要点だけをまとめた。この改革が、文部省令による大学設置基準の大綱化と東京大学における大学院重点化と関わっていることは事実であるが、東京大学では大綱化あるいは大学院重点化の実施に先立つ平成元年から全学的な委員会で前期課程教育の改善が継続的に検討されていた。特に、「臨時東京大学前期課程教育改善推進委員会」（平成3年度、委員長：鹽野宏総長特別補佐）は、必修科目および単位数の軽減、選択の自由化、外国語教育の改善、小人数教育の充実、進学振分け制度の改善など具体的な提言を行った。この提言が今回の前期課程カリキュラム改革の直接の契機となっており、いわゆる「大綱化」に伴う全国の国立大学の一般教育等の改革の中でも性格と規模の両面で特異的なものである。

前期課程教育の改革を断行するに当たり、「リベラル・アーツ」を次のように再定義した。

（1）専門教育に進む前段階において、同時代の知に関する広い見識と、それによって涵養される豊かな判断力を養う。

（2）同時代の知の基本的枠組み（パラダイム）の学習と、そのような知にとって不可欠の基本的な技能（テクネー）の習得。

すなわち、前期課程教育の目的は、特定の専門分野に偏らない総合的な視野を獲得させると

同時に専門課程に進むために必要最少限の知識や知的技能を身につけさせ、専門的なものの見方、考え方の基本を学びとらせることにある。このような理念は、従来の一般教育等における「人文科学」「社会科学」「自然科学」「外国語」「保健体育」という学科目の枠組みを廃止し、授業科目の新たなカテゴリーとして「基礎科目」「総合科目」「主題科目」という3分類を導入するというカリキュラムの上での大きな変革をもたらすこととなった。

## 2. 進学振分け制度改革の背景と概要

東京大学の場合、学生は文科一類、二類、三類、理科一類、二類、三類の6科類に分かれて入学する。進学先の専門学部は、それぞれの科類によってある程度は決まっているが、最終的には2年生の秋に行われる進学振分けによって決定され、その機会に進路を変更することも可能となっている。すなわち、多くの国立大学のように学生が入学当初から学部・学科別に分かれる「縦割り型」ではなく、2年間の前期課程教育の間にさまざまな学問の最先端に接し、自分の適性を見極めた上で専攻分野を選択できる「横割り型」を採用していることが東京大学の教育体制の特徴である。そこには、東京大学の教育が本郷キャンパスと駒場キャンパスの双方を必要とし、両キャンパスが距離的に離れていることから起こる現実的問題の解決という意味が新制大学発足当初からあったことは否定できない。しかしながら、この地理的条件をむしろ利用する形で、この「横割り型」は、50年近くにわたって東京大学の発展に貢献してきた。

この「横割り型」を堅持するためには、進学振分けは避けられない問題である。旧制度では進学振分けは、すべての学部・学科等の進学単位において、2年生夏学期までに履修した科目の成績の総平均点を用いて1回で行われていた。この旧制度に関しては、1回で全ての学生を振り分けていたため投機性が高く、また本来の志望を隠して偽りの志望届けを出し、他の学生の志望選択を混乱させる（いわゆる「ダミー」、「影武者」）行為もまま見られること、一律総平均点制度は一次元的成績評価による一次元的序列付けをいっそう助長することなどが、従来から問題点として挙げられていた。

カリキュラム改革によって、進学振分け制度も改定しなければならない事態になった。すなわち、改革以前の制度では、科類ごとに必修科目（限定された範囲から選択履修する「選択必修科目」を含む）が定められ、これを全て履修することが前期課程修了の要件であった。これに対して、カリキュラム改革では、必修科目の見直しを行ってこれをできるだけ削減すると同時に、「修了必要単位数」という概念を新しく導入したのである。これは、必修科目の他は自由に選択した科目を履修させ、取得した単位の合計が一定の単位数に達することをもって前期課程修了のための要件とするものであり、学生の知的関心に基づく自発的・積極的な科目履修を奨励するための措置であった。この概念の導入に伴って、進学振分けの平均点算出法も変わらざるをえなかった。

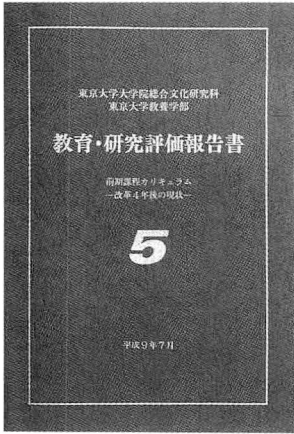
さらに、新制度では法学部、経済学部、医学部医学科を除く進学単位で二段階進学振分けが採用された。二段階進学振分けは、従来から指摘されていた上述の問題点を少しでも解決する方策として工夫された制度で、第一段階でそれぞれの進学単位の定数の7割を単純平均点を用いて内定し、第二段階では、各進学単位が独自に定める成績評価点を用いて定数の残りの人数を成績順に内定する。単純平均を用いる場合でも、新制度では総合科目の成績として上位18単位が算入されるようになったのは大きな変更点である。この二段階進学振分け制度の導入により、学生の履修状況に大きな変化が起り、今回の外部評価の重要なテーマの一つとなった。

3. 自己点検・評価の概要

教養学部が1992年以来取り組んできた自己点検・評価の項目は表に示すように非常に多岐にわたっている。これらの報告書を基礎資料として、問題点を多角的に分析・整理した上で外部評価資料を作成した。

『教育・研究評価報告書』各号で取り扱った前期課程教育に係る項目

|                                   |                                                                                                        |
|-----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教育・研究評価報告書<br>平成5年11月             | アンケート調査結果と評価<br>学生の履修状況からみたカリキュラム改革の評価<br>基礎科目、総合科目                                                    |
| 教育・研究評価報告書2<br>平成6年7月             | 英語カリキュラム改革、特に「英語Ⅰ」<br>基礎科目「情報処理」                                                                       |
| 教育・研究評価報告書3<br>平成7年9月             | 基礎科目「基礎実験」<br>スポーツ・身体運動とその関連科目<br>主題科目                                                                 |
| 教育・研究評価報告書4<br>平成9年3月             | 教官・教育組織と運営の実状                                                                                          |
| 教育・研究評価報告書5<br>改革4年後の現状<br>平成9年7月 | アンケート調査結果からみた前期課程教育の分析<br>学生の履修状況からみた前期課程教育の分析<br>進学振分けについて<br>基礎科目、総合科目、主題科目<br>新カリキュラムにおける自然科学教育の問題点 |



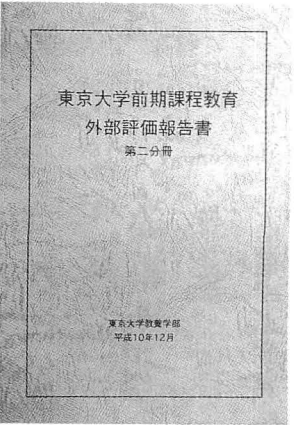
4. 外部評価の概要

外部評価を実施するにあたって、次のような項目について評価を依頼した。

- I リベラル・アーツ教育の理念と意義
- II カリキュラム全体構成について
  - ① 「基礎科目」「総合科目」および「主題科目」の分類について
  - ② 必修単位を削減し、履修の自由度を増大したことについて
- III 各科目のカリキュラムについて
- IV 進学振分けについて
- V その他

前期課程教育に対する外部評価を受ける際の「外部」には二重の意味がある。すなわち、東京大学の外という通常の意味での「外部」ばかりでなく、前期課程における教育を基礎としてそれぞれの専門分野における教育を行う後期課程諸学部は、前期課程をあずかる教養学部にとって、より直接的な「外部」ということができる。そこで、総合文化研究科・教養学部は、まずこの狭い意味での「外部」に評価を仰ぎ、次にその評価を含めた上で広い意味での「外部」に評価を依頼するという二段階方式を取ることを基本方針とした。

後期課程諸学部到新カリキュラムの評価を依頼するにあたり、1997年7月から8月にかけて外部評価作業委員会の代表が順次本郷9学部を訪れ、「前期課程教育に関する意見交換会」をもった。そこでは、基礎資料の概要、外部評価の趣旨等を説明したのち忌憚のない意見の交換がおこなわれ、非常に有意義であった。教養学部で用意した評価資料に、後期課程諸学部の教官の点検・評価を加えて、これを東京大学外の有識者により評価していただいた。『[駒場]1997』p.111に述べたように、外部評価委員は9名の方々に1998年1月24日に東京大学前期課程教育外部評価シンポジウムを開催した。外部評価の詳細は、すでに『東京大学前期課程教育外部評価報告書』（第一分冊および第二分冊として平成10年12月刊行）として公表しているので、ここでは主要点だけ述べたい。





### リベラル・アーツ教育の理念と意義

リベラル・アーツ教育を前期課程教育の中核におくことについては、後期課程諸学部および外部評価委員からおおむね好意的に評価された。しかし、何をもってリベラル・アーツ教育と考えるかは学部によって大きく異なり、教養教育重視の立場から新カリキュラムを高く評価する意見がある一方で、新カリキュラムでは将来の専門の基礎となる部分に不足するものがあるとする意見もあった。

新カリキュラムでは、基礎科目は「最低限身につけておくべき基本的な知識・技能などを習得するためのもの」、総合科目は「現代において共有すべき知の基本的枠組みを多様な角度から習得するためのもの」と規定されており、学生に配布する『履修の手引き』にも、この定義は記されている。しかし建前上の定義を学生に知らしめること以上に重要なのは、リベラル・アーツ教育を漠然とした旗印としてかかげるのではなく、前期課程教育においてどこまでを専門基礎教育とし、どこまでを教養教育とするか、また、教養教育でありかつ専門教育でありうるような授業はどのような分野でどの程度可能なのかという問題である。平成9年1月に教養学部が実施したアンケート調査では、前期課程においてリベラル・アーツ教育を行うことについて、肯定的評価が教官で92.9%、学生で86.5%に達している。しかし教官の自由記入を見ると、「理科系の科目は文科系にくらべて積み上げの必要性が高く、理科系の基礎訓練を総合科目で行うことは無理である」（『教育・研究評価報告書5』p.16）という意見が教養学部の教官自身の口から発せられており、後期課程諸学部から出された問題を教養学部内部でさらに検討して行かなければならないことを示している。

外部評価シンポジウムでは、教養学部のリベラル・アーツ教育を高く評価した上で、いくつかの批判や注文が述べられた。

なかには東京大学全体ないしは日本の教育全体に対する批判の意味合いが強く、必ずしも教養学部だけの問題とは言えないものもあるが、以下のように整理できよう。

(1) リーダーシップのある人材を育てているか、良い意味でのエリート教育が足りないのではないか——国際社会は日本に対してリーダーシップをとってほしいと望んでおり、世界の中で自由に動けるような卒業生を養成していくべきではないかという提言があった。また、日本のエリートの脆弱性ということが問題になっている現在、大学は良い意味のエリート（国際的な人材、倫理性の高い人間、ロジックを重視する人間）を育てることが重要であろうと述べた上で、例えば「基礎演習」などの機会をとらえて、社会の中の東京大学とはどういうものなのかということを客観的に考える機会をつくって行くべきだという具体的な提言があった。

(2) 国際化に対応できる人材を育てているか——東京大学は海外での勉強をあまり強調していないので、学生のグローバル・コンペテンツを伸ばすために、少なくとも1学期、できれば1学年、海外で勉強する機会を増やすべきであるという提案である。さらに、東京大学はあまり国籍にこだわらないで、世界的に優秀な教授を採用するべきであるとも提案があった。

(3) 批判的思考や発見的態度を持った人材を養っているか——ある委員は、アメリカのリベラル・アーツが重視するのは、職業の準備のためではなく、既成の状態をそのまま受け入れるのではなくて、クリティカル・シンキングを養うことであると述べた。また、別の委員は、同じような趣旨で、一定の内容をただ既成の知識として習得させるのではなくて、それを契機として発見的に問題に取り組むための精神的態度、方法といったものを身につけさせるような指導方法が重視されるべきであると述べた。

(4) 改革の成果を積極的に外に向かって公開しているか——資料は特に秘密にされているわけではないのに、量が膨大すぎて、結局は公開されないのと同じことになり、結果的に、外との間に壁を作っていることになっている。東京大学は、「基礎演習」や「基礎講義」などの実践の成果についても外に知らせる努力をすべきであり、大学の全貌を外に説明できるような広報担当者を育てるべきであるという提言があった。

(5) 前期課程と後期課程の関係をもう一度見直すべき——前期課程1.5年～2年という年限は、駒場の教養学部の後期課程にとっては極めて適切な教養教育になっているのかもしれないが、本郷の専門学部にとっては必ずしもそうではない、という不満があるのではないか。91年の大学設置基準改正に対しても、東京大学は前期課程のみの改革という形が先行してしまい、専門課程と教養課程の関係を問い直す作業は弱くなったのではないかという意見があった。いずれにしても、ほとんどすべての委員が後期課程との連携を密にして、丁寧に修正していくべきであるという意見を述べた。

## 教育内容・カリキュラム

教養学部前期課程で開講される授業科目を「基礎科目」「総合科目」「主題科目」と分類したことに關しては、後期課程諸学部および外部評価委員の賛意が得られた。この新しい分類は、他大学に大きな影響と刺激を与えたと高く評価する意見もあった。しかしながら、大筋では高く評価されたものの、各科目の内容等には批判や改善の提言があった。

まず第一に、「基礎科目」と「総合科目」の区別が明確ではないという批判が多く出され、特に、理科教育との関連で議論がされた。カリキュラム編成にあたって一つの条件が必修科目の軽減と選択の自由化であったので、必修である「基礎科目」を絞り込む必要があった。そこで、理科系の学生全員が必ず習得しなければならない事項を「基礎科目」として絞り込み、ある専門分野に進むのに必要な基礎教育に類するものであっても、他の専門分野によって必須度が多少なりとも少ない内容を「総合科目」の中に入れた。このような経緯のために、自然科学の「基礎科目」だけが理科系の専門基礎ということではなく、あくまで「基礎科目」と「総合科目」の中のいくつかをセットにして理科系の基礎教育が展開される結果となった。しかしながら、理科系では、基礎から順次積み上げていくトレーニングが必要な専門分野が大部分であり、専門基礎ともいえる基礎科目が絞り込まれたために、自然科学の教育という点で手薄感が拭えないことは事実である。文科系と理科系の教育方法には違いがあり、異質なものが併存していることが問題であるとの指摘もあった。いずれにしても、現在の枠組みの中で対応できる事項と枠組み自体を改変しなければ対応できない事項を整理して、改善する必要がある。

科目別の評価を見ると文科系の科目では外国語（特に英語）に対するものが多かった。どの意見も一様に読解力を重視している。これは学生の希望とも、また彼らの自己評価とも大きく隔たっている。昨今、外国語が問題になるとき「運用能力」が重視され、かつそれがいわゆる会話能力と同義であるかのように見なされる風潮があるが、専門分野の文献を読む力は学問研究にとって極めて重要な外国語の運用能力であってみれば、この意見は当然のことである。

## 進学振分け

進学振分けに関する評価としては、進学振分けが圧力となって点取り競争をもたらしているのではないか、そしてそのことがリベラル・アーツ教育に悪影響をもたらしているのではないかという懸念が多く出された。たとえば、「点取り競争」については、「過剰登録、過剰履修」や「理系の学生が総合科目で文系の単位のとりやすいほうに走る」といった点にあらわれているという指摘があった。また「リベラル・アーツ教育への悪影響」については、「入学後十分なゆとりもなく、1年ちょっとで進学振分けのプレッシャーにさらされる」がために、「学生の多様性に応えようとして必修科目を減らし多様な授業で応えよう」という方針が十分に活かされなくなっていると指摘された。また、「コンマー桁とか二桁の平均点で決まるといえるのは、どうも理解できない。……この事態は学部の定員の弾力化によって、避けられないか」、面接等も活かした「適性判断というわけにはいかないか」との意見もあった。

以上の指摘はいずれも十分考慮すべきものであり、後期課程各学部との話し合いを含めた、われわれの工夫でそのかなりの部分の改善が可能と思われる。東京大学の教育体制の一つの基軸をなしているのが進学振分け制度であるから、①各学部あるいは各学科の研究分野は国際的な流れの中でどのように位置付けられるのか、②各学部あるいは各学科において学生に対してどのような可能性が開かれているのか、という情報が学生に正確に伝わる必要がある。学生から見て、進学振分け制度がわかりやすいものでなければならない。各学部学科の実情に応じた進学振分け制度も必要であろうが、学生にとって学部学科による要請が互いに矛盾するような制度では、混乱を起こさせることになりかねない。したがって、現行の制度的枠組みを学生がどのように受け取っているのか、またそれに対してどのように反応しているのかを詳細に追跡調査して、検証しながら、今後もよりよい制度をめざして改善の努力を続けていかなければならないであろう。

## その他

限られた紙面では書ききれない意見・提言が行われたが、その中から教育を受ける側の学生気質についてのコメントのみを紹介したい。

新制大学が発足した当時から50年近く経過した現在、社会全体の状況はもちろん、学生の意識、勉学意欲が驚くほど変化し、かつ多様化していることは誰の目から見ても明白である。おそらく、教官が与えようとするものと学生が求めているものとの間に大きなギャップが生じているのが現状であろう。教養学部が発足した当初高らかに掲げたりベラル・アーツの教育理念は大きな成果を上げ、東京大学の発展に大いに貢献したのであるが、リベラル・アーツの理念を現実化するためには、学生自身がその意義を正しく理解し、これを活かすような行動をとることが前提であろう。ところが、履修科目の過剰登録や学生が選択した科目の調査結果を見ても明らかなように、教官が期待したようには必ずしも学生が行動していない部分もある。高等学校までの教育が非常に多様化した現在、知的訓練を通じて、いかに若い学生の勉学意欲をかきたて、未知の分野に挑戦しようという意欲をいかに啓発するかが大学教官に課せられた課題である。

このような問題は言葉で言うのは簡単であるが、実際には難しい問題を含んでいる。たとえば、履修科目の過剰登録を防ぐためには、「履修制限を設ければいい」という結論が簡単に出るであろう。しかし、ただ履修制限を設けただけでは、学生に暇ができて遊びなさいと言っているようなものである。履修制限を設けたために生じる時間には、厳しい知的訓練を課する方策がなければ、その制限自体が全く無意味になるのである。このことは、教官に対して今までの授業のシラバスや方法などを抜本的に考え直すことを要求していることにもなる。カリキュラム改革および組織改革を活かすためには、学生と教官双方の意識改革が必要であるものと思われる。

---

## 5. 21世紀に向けて

新制大学発足以来の大改革は、企画（planning）——実施（realization）——評価（evaluation）と進んできた。企画の段階では予想しなかったことが評価の結果明らかになったことも多々ある。これらの中には、すでに改善した事項もあるし、長期的展望に立って手直ししなければならない事項もある。また、評価の段階も異なったレベルの評価があり、今後は個々の授業の評価を開始する予定である。

1991年の大学設置基準の大綱化（正式に言えば「大学設置基準の一部を改正する省令」）は文部省の大学政策の大転換を意味していた。この改正によって、カリキュラム編成に関する制約が大幅に緩和され大学の自由裁量に委ねられたわけであるが、そこには交換条件が明示されていたのである。すなわち、大学は自らの教育研究活動に関する自己点検・評価の実施を社会的責務として課せられることになった。1998年（平成10年）10月の大学審議会の答申『21世紀の大学像と今後の改革の方策——競争的環境の中で個性が輝く大学——』では、さらに一歩踏み込んで、自己点検・評価体制の充実と同時に客観的な立場から評価を行う大学共同利用機構に類した機関の設置を提言している。現在、大学評価機関を設置する作業が急ピッチで進行しており、1999年（平成11年）度には、準備室の設置がすでに決定しており、2000年（平成12年）度には新しい評価機関が活動を開始することになろう。

これからは、各大学がそれぞれ独自の理念を掲げて、個性豊かな教育研究を通じて国際社会にその成果を還元することが求められている。このために、新しい企画をし、これを実施し、さらに評価するというサイクルを常に動かしていることが必要である。新しく設置される評価機関には、各大学の活動を活性化し、鼓舞することが期待されている。

## 2 キャンパス・プラザの竣工と利用開始

1998年春、駒場キャンパスの中央を横切る銀杏並木の東端、生協購買部の正面に、瀟洒な3階建ての建物2棟からなる多文化交流施設（A・B棟）と、一二郎池のほとりの多目的ホール（C棟）が完成した。これらを総称してキャンパス・プラザと呼んでいる。

キャンパス・プラザは、駒場学生寮廃寮後の跡地を利用した駒場キャンパス再開発計画、いわゆるCCCL（Center for Creative Campus Life）計画の一環として構想されたもので、キャンパスの構成員である学生・教職員がその場に集い、さまざまなジャンルで活発に交流するとともに、地域住民をはじめとする大学の外部にも開かれた新たな文化活動の場をつくりだすことを目的としている。そのために施設（ハード）と組織運営（ソフト）の両面で、これまでにない新しい試みがなされている。以下A・B棟とC棟について、それぞれハード面とソフト面での特色を概観してみよう。

### 多文化交流施設（A・B棟）

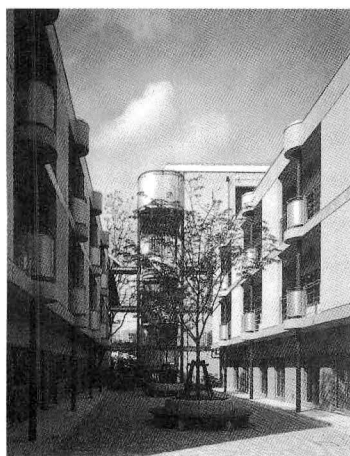
キャンパス・プラザA棟・B棟と呼び慣わされている2棟の建物は、それぞれ床面積約1,200m<sup>2</sup>、3階建てで、サークルやクラスの課外活動や留学生との交流活動をはじめとするさまざまな文化活動の拠点として建設され、1998年6月6日に開館した。

この建物の設計にあたっては、その初期段階から利用者の中心をなすと想定される学生の要望を最大限とりいれるべく、建設委員会内に設置された「キャンパス・プラザ建設小委員会」が中心となって、1996年6月10日の「建設計画説明会」を皮切りに、数度にわたって自治会、学友会、学生会館委員会などの学生自治団体代表との協議を重ね、また「キャンパス・プラザに皆さんの声を」と題する文書や「キャンパス・プラザ資料集」を配布して、学生への情報の伝達と意見交換につとめた。こうした協議は必ずしも円滑に運ばなかったものの、次第に学生の理解も深まり、さまざまな要望が寄せられるようになって、1997年1月には具体的なプランをほぼ固めることができた。それにもとづいてさらに施設部および学生側との調整を行って、現在の建物の最終的な設計図が仕上がったのは、1997年の春のことであった。

建物内の構成は、A棟にはロビーと管理室、学生自治団体室のほか、会議室、音楽練習室など、キャンパス内のさまざまなグループ・団体が共通に利用するスペースが配置されている。とくに3階の音楽練習室（大中小、計10室）には防音設備・空調設備が整えられ、これまでとなくキャンパス内や近隣住民からの苦情の種になっていた騒音問題の解消が図られている。学生の課外活動のなかでは音楽系サークルをはじめとする音楽練習はかなりの比重を占めており、地域との共存をめざす観点からしても、こうした施設へのニーズは今後ますます増大すると考えられる。その意味でこの新しい施設は重要な第一歩として評価されるべきだが、これで十分ということではなく、これからも積極的な取り組みが必要である。

2階の会議室（大中小、計7室——うち1室は可動間仕切りによって分割可）は、さまざまなキャンパス内のグループが文化交流活動のために所定の手続きにもとづいて使用できるようになっている。現状では、主としてサークルやクラスのミーティング、練習などに使われているが、一般学生と留学生の交流という新しい試みの場としても生かされている。これは留学生相談室などの呼びかけでつくられたボランティア・グループが運営するスペースで、学生が継続的に留学生と交流し、相談役として彼らをサポートするとともに、たがいに文化的・知的刺激を受けあうことによって、相互理解を深めることを目的としている。「多文化交流」を趣旨とするキャンパス・プラザに、こうした新しい出会いの場が設けられたことはきわめて意義深いと言えるだろう。今後このような活動が、ますます活発に展開されることが期待できる。

B棟の各階にはおよそ38m<sup>2</sup>の部屋がそれぞれ8室ずつ配置されている。これらの部屋は基本的



A・B棟の中庭

に学生サークルの課外活動用のスペースにあてられ、1室を複数の団体が共同で使う形がとられている。

前述のように、キャンパス・プラザの新設にあたっては、教養学部はその設計の当初から学生との意見交換につとめてきたが、完成後に建物を実際に運営していく方式についても、早い時期からさまざまな議論がなされ、大学という場にふさわしい形態が模索されてきた。キャンパス・プラザの趣旨である駒場キャンパス全構成員による多彩な文化活動・交流の場ということを見ると、日常的な施設の運営は学生の自主的活動にゆだねるとしても、管理者である学部とのあいだの十分な意志疎通が必要と考えられた。この双方向の意見交換・協議の場はぜひとも設置すべきものであった。

そのために、教養学部は、開館後に双方のパイプ役として「キャンパス・プラザ運営協議会」を立ち上げることをめざし、学友会をはじめ学生自治会、学生会館委員会、北ホール委員会などの学生自治団体に呼びかけて、その「準備会」を1997年秋から開くことにした。この準備会では、運営方式を含めて、キャンパス・プラザ立ち上げの現実的な課題を話しあうことが予定されていた。この準備会の議事は、学部側から学生委員長、学生側からは学友会議長が司会を担当し、駒場の構成員全体にオープンな形で進められた。議論は「管理運営規則」「運営協議会細則」など、実際の利用にあたって必要な規則の文案から、いわゆる「建新」によって購入される備品の選定にいたるまで幅広く、精力的につづけられた。しかし運営方式に関しては、一部の学生から「運営協議会」という形式自体が学生利用者の利益を損なうものだという意見が出て議論が紛糾し、なかなか規則の制定にまではいたらなかった。そこで1998年2月からは協議の場を「キャンパス・プラザ（仮）学部・学生協議会」と改称し、運営のあり方について根本から討議しなおすことになった。時には深夜にまでおよぶ十数回にわたる会合が開かれ、関係者の粘り強い努力の結果、結局、開館直前の5月に合意に達することができて、管理運営のための諸規則も成文化された。

この学部・学生協議会の議論において、駒場キャンパスのあり方や運営について、学生と教職員のあいだで真摯な議論が積み重ねられたことは、将来にわたって相互の信頼関係を築きあげていくうえで、大きな意味があったと考えられる。また開館とほぼ同時にスタートした「多文化交流施設運営協議会」では、学部側・学生側同数の委員によって、予算をはじめとする具体的な施設の運営をめぐる話し合いが定期的に行われており、実際の運営業務を担当する学生会館委員会の努力もあって、日常的な施設の利用は順調に行われている。キャンパス・プラザA・B棟の開館時間は、原則として、12月28日から1月7日までの冬期閉館期間を除く毎日午前9時から午後9時までである。

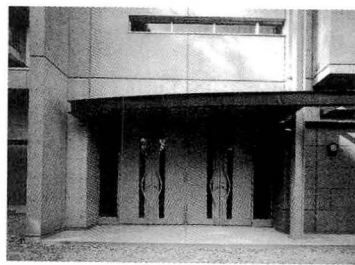
## 多目的ホール（C棟）

教養学部多文化交流施設キャンパスプラザの一環として、A・B棟とともに1998年3月に竣工した多目的ホール（C棟）は、「駒場小劇場」として長年にわたって東京大学の演劇活動の中心として親しまれ、幾多の演劇人をうみだしてきた旧駒場寮食堂北ホールの代替として構想された。ホールの設計にあたっては、A・B棟と同じように、その初期段階から学生の声を採り入れるべくキャンパスプラザ建設小委員会と北ホール委員会とのあいだで継続的に話し合いがもたれ、ホール内部の構造の詳細や楽屋・倉庫等の付属施設、照明や音響の設備・機材など、かなりの細部にまで立ち入って検討が重ねられた。その結果つくりだされたホールは、黒壁に囲まれた約16メートル四方の空間という、いたってシンプルなものである。この何もない空間に、公演のたびごとに舞台を組み、客席を設営することによって、通常の劇場とはちがった自由なパフォーマンス空間を生み出すことができる。ホールの内部設備も大型の空調装置はもちろんのこと、本格的な調光卓を備えた調整室、豊富な照明機材など、かなり充実したものとなっている。

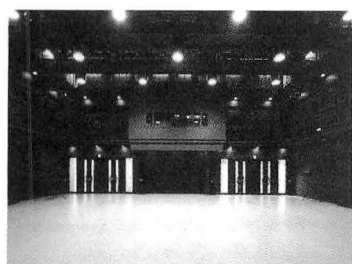
多目的ホールの運営に関しては、A・B棟と同じく1997年秋からの「運営協議会準備会」、「学部・学生協議会」の場でその方式が検討され、1998年7月に制定された「東京大学教養学部多目



B棟外観

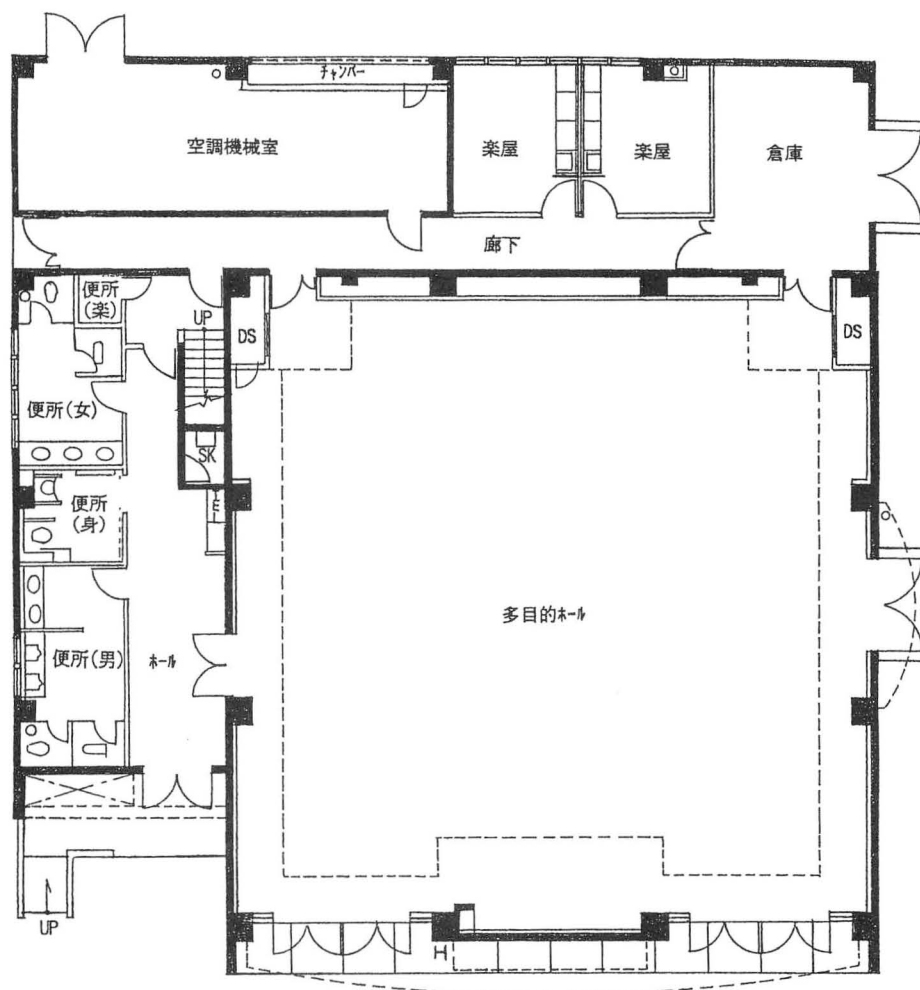


多目的ホール入口



多目的ホール

多目的ホール1階平面図



のホール管理運営規則」にもとづいて設置された文化活動施設運営協議会および多目的ホール使用団体連絡会議がその任に当たっている。運営協議会は学部代表5名、学生代表5名の委員から構成され、「多目的ホール使用細則」の制定、ホール内設備の改修・補充、使用日程の承認など、ホールの管理運営に関わるさまざまな事項を審議している。また使用団体連絡会議（通称「ホール会議」）は、学生によって構成される総務部を中核として、「使用細則」にもとづく使用予定の調整、使用状況の監督など、実際のホールの運営業務に携わっている。

多目的ホールは、1998年7月2日の教養学部・表象文化論研究室共催による朗読パフォーマンス〈「書物」——精神の楽器としての〉で柿落としがなされた。松浦寿輝教授の詩をテキストに、パトリック・ドゥヴォス助教授の演出で上演されたこのパフォーマンスは、一般公募によって集まった大学院・後期課程・前期課程の学生を中心に、外国人非常勤講師や職員をも交えた多彩な顔ぶれで、映像・音響・照明と新ホールの設備を駆使して行われ、駒場キャンパスにおける新たな文化の発信基地の誕生を祝うにふさわしいものとなった。秋以降は、学生の団体による演劇公演、オルガン委員会による特別コンサート、駒場祭の文Ⅲ劇場など、さまざまな公演活動に利用されているほか、学生サークルによる日常的な練習活動の場としても広く利用されている。

多目的ホールはA・B棟と同じく、原則として、毎年12月28日から翌年1月7日までの閉館期間を除く毎日午前9時から午後9時まで利用することができ、使用形態としては公演・発表会等のために1週間程度つづけて使う「継続使用」と、その空き時間を練習等に使う「一般使用」に区別されている。いずれの場合も所定の手続きによって、あらかじめ申し込んでおくことが必要

---

である。

キャンパス・プラザを構成する多文化交流施設A・B棟と多目的ホールC棟は、一見したところ学生会館や北ホールなどの従来の課外活動施設と変わらないように見えるかもしれない。だが、設計段階から開館にいたるまで学部と学生のあいだで精力的に積み重ねられてきた話し合い、そして開館後学部と学生が協力して運営にあたっていく姿勢は、駒場キャンパスにこれから新たな施設を建設していく際のひとつの指針となるものだろう。もちろんキャンパス・プラザのすべてがうまくいっているわけではない。すでに利用者からは設備や備品の不足や不具合が指摘されているし、環境や資源への配慮にも不備があるかもしれない。そして、それらを整備するための予算が潤沢に用意されているわけではないことは、今さら言うまでもないだろう。しかし施設のハード面でも運営組織のソフト面でも、キャンパス・プラザが記した一歩は重要な意味をもっている。この一歩の先に、21世紀の駒場キャンパスの豊かな創造的生活が展開されることを期待したい。

### 3 駒場キャンパスマスタープラン「駒場地区駒場Ⅰキャンパス整備計画概要」策定について

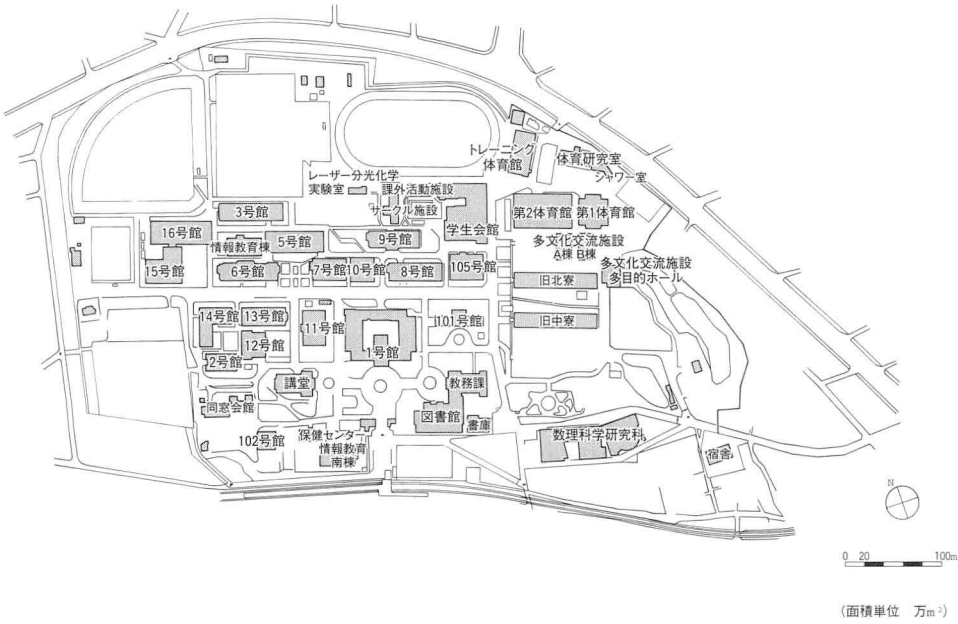
#### 1. はじめに

東京大学では、本郷地区キャンパス、柏地区キャンパス、駒場地区キャンパスをその基幹をなす3極として位置づけ（「東京大学キャンパス計画の概要」平成4年評議会承認）、各地区のキャンパスの整備に努めてきた。各地区キャンパスの将来計画は、この「東京大学キャンパス計画の概要」の趣旨に則り、その基本計画を定める「（再）開発・利用計画要綱」とこの要綱に基づいて基本計画を実行に移すための具体的な建物の配置計画を定める「整備計画概要」の2段階構成をとっている。そして、駒場地区キャンパスの「整備計画概要」に関しては、総合文化研究科・教養学部、数理科学研究科の位置する地区を「駒場地区駒場Ⅰキャンパス」、先端科学技術研究センターのある地区を「駒場地区駒場Ⅱキャンパス」と呼び、それぞれの独自性を尊重して別々に「整備計画概要」を策定することになっている。

本郷地区キャンパスにおいては、平成5年に「本郷地区キャンパス再開発・利用計画要綱」が承認され、平成6年に「本郷地区キャンパス第1次整備計画概要」が承認された。柏地区キャンパスに関しては、平成7年に「柏地区キャンパス開発・利用計画要綱」が承認され、平成8年に「柏地区キャンパスの整備に関する当面の方針」が承認された。駒場地区キャンパスに関しては、平成5年に「駒場地区キャンパス再開発・整備計画要綱」（以下「要綱」と略記）が策定され、平成6年に「駒場地区駒場Ⅱキャンパス第1次整備計画概要」が承認された。しかしながら、「駒場地区駒場Ⅰキャンパス第1次整備計画概要」（以下「整備計画概要」と略記）は、旧駒場学寮問題もあって現在まで策定されずに至っている。

「整備計画概要」は概ね5年ごとに見直すこととなっており、平成11年の本郷地区キャンパスの更新時期にあわせて、各キャンパスの「整備計画概要」を改訂することとなり、駒場Ⅰキャンパスについても、これを機会にその策定が求められた。この「整備計画概要」は、その将来計画を全学の意志として位置づけるだけでなく、文部省への概算要求の説明資料としても使用される重要なものであり、その策定が急がれた次第である。これを受けて、「キャンパス委員会」の下に組織された「駒場地区キャンパス整備委員会」は、「駒場地区駒場Ⅰキャンパス整備計画概要策定ワーキンググループ（WG）」を設け、その原案作成を依頼した。このWGにはキャンパス計画室から工学部岸田助教授と総合文化研究科・教養学部の加藤助教授、総合文化研究科・教養学部から浅野評議員、数理科学研究科から落合教授、事務局から整備計画課課長が参加した。原案作成にあたっては、4年前に教養学部の建設委員会で検討された案を下敷きに、WGで必要な修正を行うだけでなく、建設委員会にも諮り、総務委員会で途中経過を報告するなど、可能な限り当キャンパスの構成員の意向を尊重するよう行われたことはいうまでもない。また、12月の教授会にも諮り、若干の反対意見や疑問もあったが、最終的に承認されたことは「整備計画概要」策定への大きな前進として評価できよう。

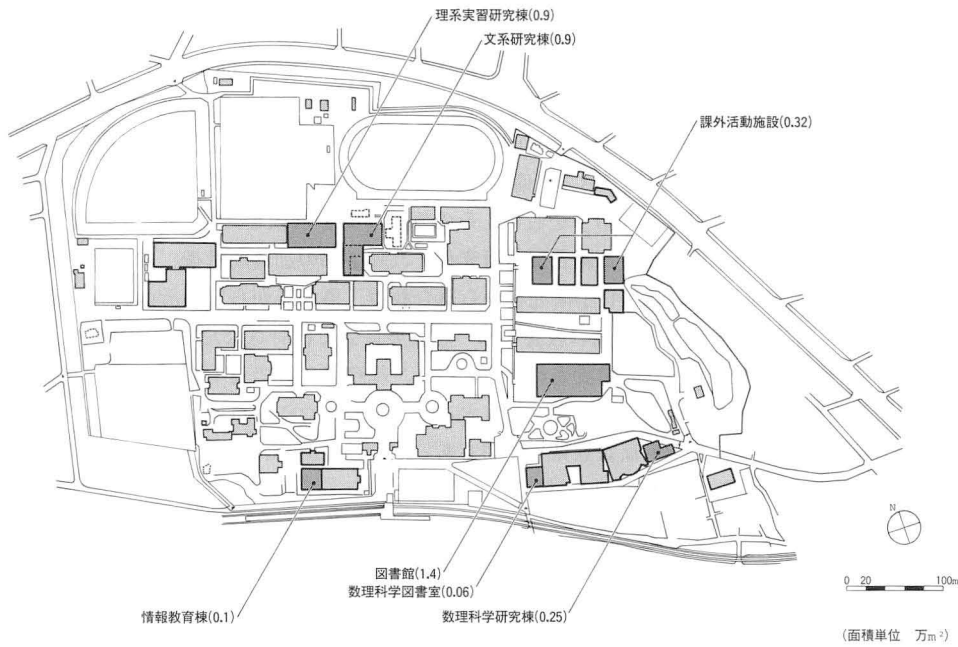
なお、この原案は、2月末の「駒場地区キャンパス整備委員会」で承認された。これを受けて年度末の「キャンパス委員会」に報告され、全学の方針となる予定である。



段階別配置図

- 凡例

  - 新築建物
  - 既存建物
  - 取り壊し建物
  - 整備済み建物
- 現状



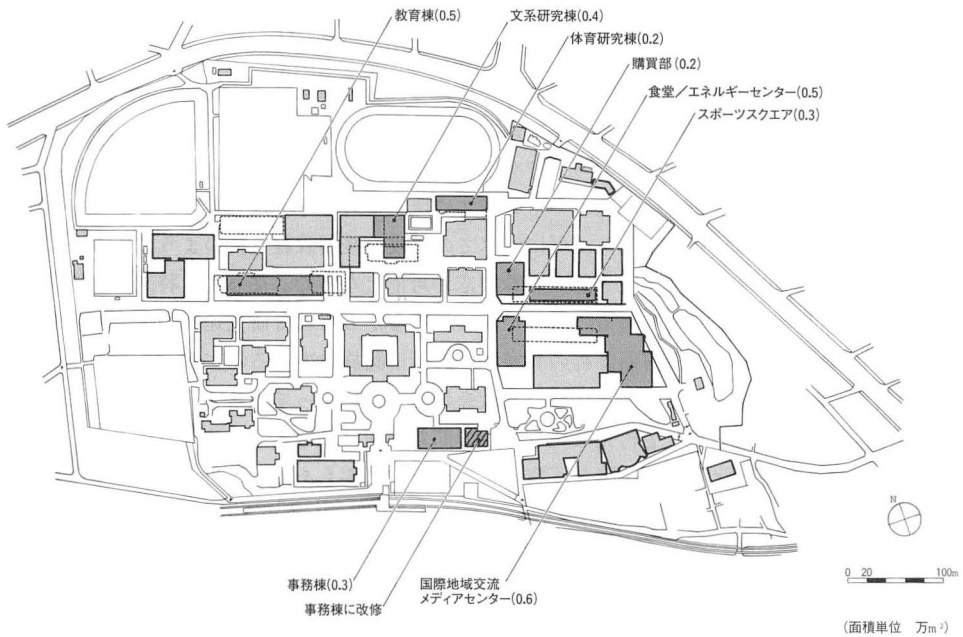
段階別配置図

|                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 第1段階整備面積        |                     |
| 文系研究棟           | 9000m <sup>2</sup>  |
| 理系実習研究棟         | 9000m <sup>2</sup>  |
| 図書館             | 14000m <sup>2</sup> |
| 情報教育棟(情報基盤センター) | 1000m <sup>2</sup>  |
| 課外活動施設          | 3200m <sup>2</sup>  |
| 小計              | 36200m <sup>2</sup> |

|                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 第1段階整備面積(数理科学研究科) |                    |
| 数理科学図書室           | 600m <sup>2</sup>  |
| 数理科学研究棟           | 2500m <sup>2</sup> |
| 小計                | 3100m <sup>2</sup> |

- 凡例

  - 新築建物
  - 既存建物
  - 取り壊し建物
  - 整備済み建物
- 第1段階



段階別配置図

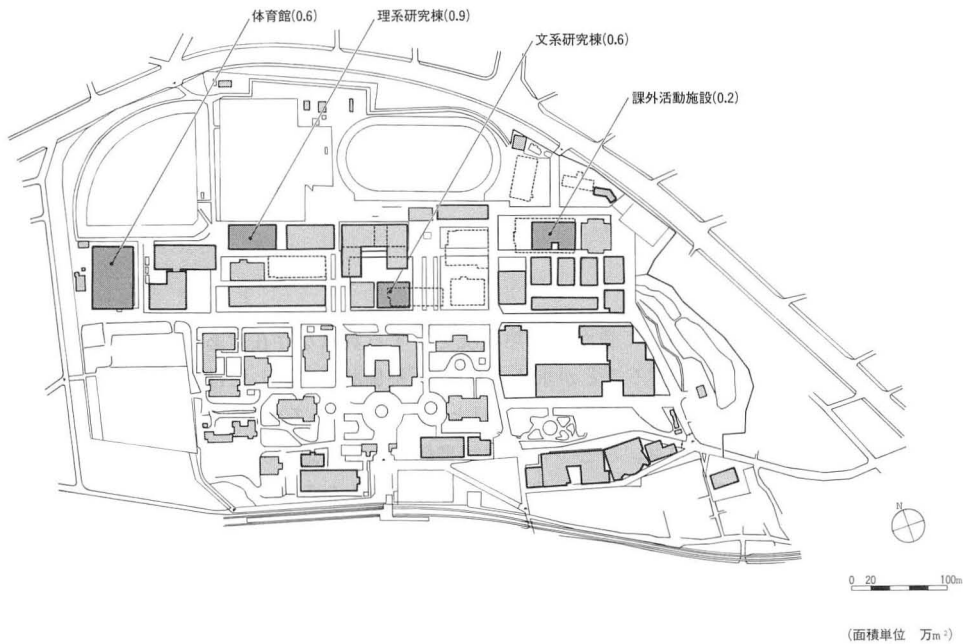
| 第2段階整備面積       |                    |
|----------------|--------------------|
| 文系研究棟          | 4000m <sup>2</sup> |
| 体育研究棟          | 2000m <sup>2</sup> |
| 教室棟            | 5000m <sup>2</sup> |
| 事務棟            | 3000m <sup>2</sup> |
| 国際地域交流メディアセンター | 6000m <sup>2</sup> |
| 食堂/エネルギーセンター   | 5000m <sup>2</sup> |

|          |                     |
|----------|---------------------|
| スポーツスクエア | 3000m <sup>2</sup>  |
| 購買部      | 2000m <sup>2</sup>  |
| 小計       | 30000m <sup>2</sup> |

凡例

- 新築建物
- 既存建物
- 取り壊し建物
- 整備済み建物
- 改修建物

第2段階



段階別配置図

| 第3段階整備面積 |                     |
|----------|---------------------|
| 文系研究棟    | 6000m <sup>2</sup>  |
| 理系実習研究棟  | 9000m <sup>2</sup>  |
| 課外活動施設   | 2000m <sup>2</sup>  |
| 体育館      | 6000m <sup>2</sup>  |
| 小計       | 23000m <sup>2</sup> |

凡例

- 新築建物
- 既存建物
- 取り壊し建物
- 整備済み建物

第3段階

## 2. 「整備計画概要」の基本的考え方

「整備計画概要」は「建物整備計画」と「建物以外の整備計画」から構成される。

### a) 建物整備計画

当キャンパスの教育研究建物は、後期課程を持つ一部を別にすれば、長期にわたって文部省の定める旧一般教育の基準面積に基づいて建設が進められてきた。旧一般教育の基準面積は、教養課程の教育に重点が置かれており、研究部分の面積が著しく小さい。この点が、駒場Ⅰキャンパスにおける教育研究面積が他のキャンパスに比して著しく不足している理由の一つであった。幸い、大学院部局化が完成し、更にすべての専攻が後期課程を持つようになり、他のキャンパスと同様の基準で教育研究建物の概算要求が可能となった。従って、将来計画を構想するにあたっては、これまで基準面積の関係で建設できなかった教育研究建物の拡充整備をまずはやらねばならない。更に、前期課程の教室棟、課外活動施設である学生会館、福利厚生施設である食堂、8号館、9号館等、老朽化した施設を建て替えによって更新する必要がある。また、現図書館は絶対的面積不足と老朽化という二つの問題を同時に抱えている。更にこうした建物の新築や更新は教育研究活動を支障なく継続しつつ行う必要もある。このような点を考慮に入れながら、可能な限り早い段階で建設可能な「整備計画概要」が求められた。

以上を総合的に考慮して完成した建物配置計画は、3段階に分けて設定され、第2段階までに基準面積の達成と老朽建物の更新が可能となるよう計画された（付図「段階別施設配置図」参照）。

第1段階の計画は、現状において直ちに実施可能なものであり、第2段階、第3段階の計画はそれぞれ前段階の建築の進行に伴い、実施が可能になるものである。なお、第2段階、第3段階に配置された計画も、前段階の計画がすべて実現しなければ実施できないというものではなく、その中には前段階の計画の一部が進行・実現すれば実施可能となり、段階が繰り上がっていくものも含まれている。

また、第2段階で旧駒場学寮が取り壊し建物となっているが、旧駒場学寮取り壊しについては、現在、係争中であり、あくまで取り壊しが認められるという仮定の上での計画である。

図書館についていえば、図書委員会を中心として約4年にわたって検討を重ねた結果である、1) 基準面積約1万4千m<sup>2</sup>を大きく越える約2万m<sup>2</sup>の規模、2) 早期実現、3) キャンパス中央部に建設という3つの条件のうち、最後の条件は満足されていない。しかし、図書館と国際地域交流メディアセンターを一体化して構想し、これまでにない新しい図書館像に基づく将来計画を可能とすることで、基準面積の問題をクリアするだけでなく、その早期実現に向けて大きな前進ははかれる案となったと考えている。

### b) 建物以外の整備計画

当キャンパスは、都心にあって豊かな自然環境を有する貴重な存在である。従って、こうした自然環境を可能な限り保全することが求められる。「整備計画概要」では、この点を配慮して「構内緑地資源の保護とその総量の確保」を項目として掲げている。図書館を旧第1研究室跡地付近に移転することにしたのも、ひとつには現図書館付近の空地であるバレーコートを中心に新築すれば、結果として現在ある梅林を伐採せざるを得なくなるということを考慮したためである。

さらに、「要綱」にあるように、キャンパス東端の池の周辺や矢内原公園等を整備し、その自然環境を積極的に活用することもはからなければならない。

整備計画では当キャンパスの歴史的景観の保全も考慮されている。すなわち、「要綱」にあるように「キャンパスの中心的な外部空間を構成する歴史的・建築的にも優れた1号館、講堂、旧図書館の正面外壁を保存」するだけでなく、これらの建物の有効利用を前提として計画された。1月の教授会で承認され、事前手続きに入ることになった1号館の登録文化財化もこの方針に沿ったものである。また図書館を移転することによって、これらの建物によって構成される正門付近の空間を建設当初の姿に戻すことも可能になる。

### 3. おわりに

以上の計画は、いま直ちに実現できるというものではない。その実現にあたっては、「整備計画概要」に基づいて概算要求を行い、予算を獲得するというプロセスが控えている。また、老朽化した建物のうち、同窓会館など、現段階では問題を保留した建物もいくつかある。更に、「整備計画概要」に項目としてあげた構内道路の計画やエネルギー対策など今後とも検討を重ねていく必要がある問題も多い。駒場のマスタープランはまだ第1歩を踏み出したところである。

## 4 環境の整備

### 情報教育棟(ECC)のシステム更新

駒場には情報教育棟が2棟ある。古い方(1987年竣工)は銀杏並木の北側、7号館の裏手であり、北棟と通称される。新しい方(1994年竣工)は正門左手、井の頭線のホームから見える位置にあり、南棟と呼ばれる。この両棟に設置されている計算機設備は教育用計算機センターが管理しており、教養学部授業をはじめとする駒場キャンパスにおける情報関連教育に利用されている。

この計算機設備を利用する資格をアカウントというが、駒場にはこのアカウントを持つ者が、前期課程の学生だけで8000人以上、後期課程、大学院学生、教職員を合わせると、1万人以上存在する。この大人数が不便なく利用できる計算機設備は大きな規模のものとならざるをえないが、その管理に要する手間も莫大である。しかも、コンピュータやネットワークの進歩の速さは、驚異的である。導入時にはその時点で最新のコンピュータを入れても、あっという間に学生が家で使っているパソコンに性能では負けるし、ソフトウェアの版は古臭くなる。そこで定期的にシステムを更新する訳だが、予算の制約があり、そう頻繁には変えられない。仮に予算が許すとしても、これだけの規模の計算機システムを入れ替えるのは大作業であり、毎年変えるなどということはとてもできない。教育を担当する側も、教育内容の継続性が必要であり、また長年にわたって蓄積された教材や授業のノウハウが、システム更新のためにしょっちゅう変更をせまられるのではたまらない。というわけで、教育用計算機センターの場合、これまでずっとオリンピックやサッカーのワールドカップと同じく、4年に1回のペースで更新を行ってきた。その更新の年に当たったのが、1998年度である。実際の更新作業は年度末に行われた。稼働開始は1999年3月であり、授業に使われるのは1999年度からということになる。

今回のシステム更新は、これまでと違う面がある。駒場では、南棟ができた時点で端末数600規模の計算機環境が、それまでの教育用計算機センターの設備(北棟にあったもの)とは別に導入された。当初はこれを教養学部が直接管理運営する体制を取っていたが、1995年10月より、その管理が教育用計算機センターに移された。一方、従来から北棟で運用されていたパソコンを中心とするシステムは、南棟システムが教育用計算機センターに移管されるより前の1995年3月に更新された(教育用計算機センターのシステム更新が、通常4年に1回であったことを思い起こされたい)。更新後の北棟システムは、南棟と同様に1台のワークステーションに7台の端末が接続され、それらがさらにファイルサーバーや他のサーバー類と繋がったネットワーク構成を取り、利用者から見れば南棟のシステムも北棟のシステムも一体化して見えるという状況がすでに実現していた。

今回のシステム更新は、このように歴史的に見ればそれぞれ別々に導入された南棟と北棟のシステムを、同時に更新するものである。システムとしてはすでに一体化して運用されていたわけだから同時に更新するのは自然であるが、予算的には北棟のシステムはもともとレンタルであり、南棟のシステムは買い取りであったという違いがあった。この買い取り分をレンタル化するための予算獲得の努力が教育用計算機センターによって精力的になされたが、結果的には未予算化の部分が残り、それに関しては全学的な支援を得て乗り切ることとなった。

さて、このような経緯で実現した新システムの概要を紹介しよう。教育用計算機センターの計算機システムは、本郷キャンパスと駒場キャンパスの両者にまたがる広域的なシステムであるが、以下では主に駒場のシステムについて説明する。

駒場の端末数は旧システムで約950であったが、この数は新システムでもほぼ同じである。旧システムは、UNIX用のX端末が主で約9割、残りの1割がパーソナルコンピュータという構成で

あった。新システムでは基本的にすべての端末が内蔵ディスクを持たず、そこで動く固有のシステム・プログラムもネットワークで配信される。このようなコンピュータをネットワーク・コンピュータという。さらにUNIXの端末としてのX端末機能とWindows端末の機能とを併せ持つ。つまり、端末固有の電子メールやブラウザのプログラムを利用するユーザは、端末のデスクトップ画面から起動すればよいし、X端末として利用したいユーザはUNIXサーバと接続するように画面を切り替えればよく、またWindowsを利用したいユーザはWindowsサーバと接続するように画面を切り替えればよい。

コンピュータの性能は、当然のことながら大幅に向上している。さらに、ネットワークの容量が格段に増大していることも、新システムの特徴である。これまで教育用計算機センターの本郷と駒場のシステム間をつなぐネットワークは、他の研究用等のネットワークと相乗りをしていた。今回は教育用計算機センター専用のネットワークとなっている。旧システムではたとえばNetscapeでWorldWideWebのページを見るのに、恐ろしく時間がかかることがあった。その原因はネットワークだけにあったわけではなく、いわゆるwwwサーバーの能力不足による部分も大きかった。しかし、ネットワークとサーバーの両方が増強された新システムでは、これまでよりはるかにwwwは使いやすくなるであろう。

1995年に南棟システムを導入した時点では、インターネットとくにwwwの利用はまだ一般化していなかった。システムの設計時には、wwwのブラウザ（当時はMosaic、その後Netscapeが中心）による利用がこれだけ進むことは考慮されていない。当時としてはやむをえなかったし、むしろその後4年間、授業などでこれを本格的に使えてこられたことが驚異的ですからある。また電子メールの利用は1995年時点でも充分想定されていたが、その利用は大きく広がった。教職員の中には、教育用計算機センターのシステムを電子メールのためにのみ使う利用者がかなりの割合を占める。このようなwwwや電子メールを中心とするインターネットは、ずっと使いよくなるはずだが、またそれに応じて利用の規模は増大し、利用形態も広がるだろう。

各利用者が使えるディスク容量の上限も大幅に増大した。旧システムでは10メガバイトの上限であったものが、50メガバイトになる。また、端末の数自身は増えないが、自分が所有するノートパソコンを持ち込めば、ネットワーク環境に接続できるような仕組みが導入される。これをDHCPと呼ぶが、その接続用の口は当初60ほど用意される。しかしいずれこの需要が増えることが予想され、その際にはさらに口を増やしていくことになるだろう。

このように飛躍的に便利になるのは結構だが、その分、不正な使用や本来の趣旨を逸脱する乱用が増えることも危惧される。旧システムでも他人のパスワードを盗み出したり、所有者が進んで教えたりしてアカウントを不正使用する例、システム管理の妨害となるような行為、さらにはホームページを利用した営利活動、著作権の侵害など、目に余る行為が横行している。ネットワークに接続したコンピュータは孤立したパソコンと異なり、常に人・社会と繋がっていること、情報は出す・受け取るの双方向性があり、ネットワークを介して情報を見る、見せる、見られるという状況にあることを、利用者は肝に銘じてもらいたい。そしてコンピュータやネットワークのシステムに何らかの支障をもたらすような行為は、駒場あるいは東京大学に限らず、広い範囲に迷惑を及ぼす可能性があることにも注意を喚起したい。

システムが新しくなって性能が一段と向上しても、利用者側から見ればまだまだ要望したいことがいろいろあるだろう。たとえば利用時間の問題である。南棟が開館した当時は、午後6時に閉館していた。しかし、学生の希望もあって開館時間を徐々に延長し現在南棟の自習室は午後9時まで開いている。また当初は開けていなかった土日・祭日も現在は図書館と同じように、午後0時から6時まで開館している。また、平日の夜間は必要に応じて自習室だけでなく大演習室や中演習室も自習に使えるようにしている。それでも自習室や演習室の混雑度は高く、とくに自習室の席は一日中ほぼ90%は埋まっている状況である。そこで、できれば24時間開館としたい。現在でも、システム自身は24時間稼働している。だから安全に開館できる体制がとれば、システム側は対応できるはずである。一つの可能性は、将来期待される新設の図書館にシステムの利用スペースを設け、そこを24時間利用できるようにすることである。そのためには建物の計画のみでなく、入出チェックのシステムをきちんと設計する必要がある。これはかな

り有望なプランといえよう。

## 図書館の整備

教養学部図書館は、第一期、第二期工事を経て1969年に完成した。そして1980年には書庫が増築され、現在の建物の全容を見ることになった。1987年と1993年には、当初の建設から20年が経過して内外装のあちこちに傷みが目立ち始めたため、閲覧室の改装を行い、あわせて閲覧室の座席を増設した。また1997年には、見た目にも汚れて薄暗くなった館内の居住環境を少しでも良くするため、閲覧室の天井と床部分の塗装を行い、あわせてブラインドの掃除と破損部分の取り換え、さらには蛍光灯の補修も行った。館内に快適さと明るさを取り戻すことができた。

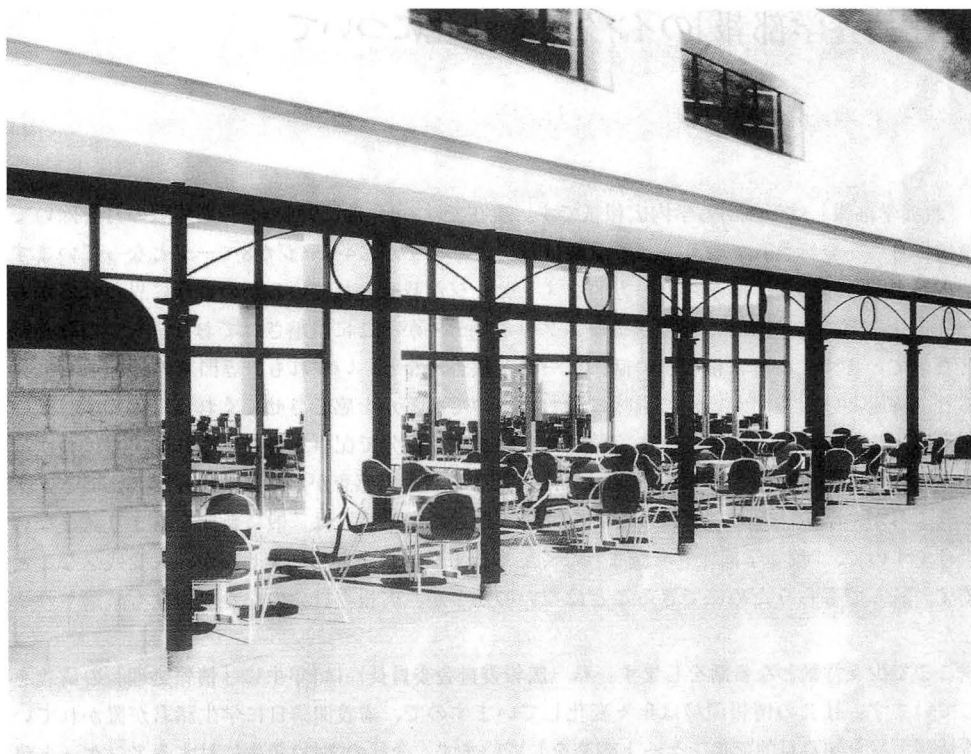
このような経緯をもつ図書館建物であるが、机、椅子、書架等の備品類の老朽化もかねてから指摘されているところであった。そこで1998年には、閲覧室の机と椅子の総入れ替えを行った。今回導入したものは、人間工学に立脚し、長時間利用しても疲れにくいよう設計されたものである。図書館利用者が、長時間にわたっても、快適に利用できる環境が供されることになった。なお、入れ替えにあたり、座席数を54席増やして総数927席とした。また利用者用端末周りも一新し、図書館専用端末機1台に机1台を割り当てて独立性を高めた。そして図書館の顔ともいべき閲覧カウンター周りの配置も変更し、利用者により応対し易い形にした。

現在の教養学部図書館の蔵書数は100万冊近くあり、また学期期間中1日あたりの閲覧利用者数は3500から5000人に及んでいる。また数年前からはビデオの館内閲覧サービスも始まり、あらたな業務も生まれている。これまで教養学部では、図書館に対して前述のような補修を行ってきたが、そろそろそれも限界に達しつつある。アンケートなどを通じて、図書館の老朽化、脆弱性は常日頃より学生から指摘を受けるところであり、この点においては多くの教養学部教職員も共通の認識をもっている。図書館立て替えが、教養学部、学生、教官、職員の一致した希望となっており、このことは本年度に作成された駒場キャンパスマスタープランに盛り込まれることになった。利便性の向上とともに、「情報」をキーワードとして、21世紀のメディアにも対応可能な新しい教養学部図書館の構想が急務である。

## 生協食堂の改装

駒場キャンパスの生協学生食堂の厨房部は、1963年、学生会館内に設置された食堂の厨房として建設された。1971年には現在の食堂1階ホール部分（748m<sup>2</sup>）が建築され、1978年には食堂2階部分（1020m<sup>2</sup>）が増築された。1987年には1階テラス部分（96m<sup>2</sup>）が設置され、さらに1991年には2階部分が拡張された（594m<sup>2</sup>）。現在では、1階に約400席、2階に約520席が用意されているが、前期課程の学生だけで7000人を抱える駒場キャンパスの食堂としては手狭で、昼食時のピーク時には、相当の混雑となっている。また生協食堂建物内にはハンバーガー・ショップとパン・ショップがあり、加えて昼食時には、座席数の少なさをカバーするといった意味あいもあり、食堂入口部分において弁当の販売も行っている。昼食時だけで、食堂1、2階合せて1日約2500食が供されているほか、ハンバーガー・ショップでは約650食の売り上げがあり、弁当の販売も約500個にのぼっている。

食堂建物は、厨房部と1階ホールが、建設から20年以上の年月が経過し、老朽化が目立っていた。残念ながら「狭くて汚い」との声が学生より寄せられることもあった。教養学部では、清潔でアメニティーの高い学生食堂をとの強い要望に答えるため、5年前から改装計画を進めている。1996と1997年度には2階ホールのイスとテーブルを更新した。そして今年度は、食堂1階と2階ホールの全面的な改装を行い、あわせて厨房部の改装、改善工事を行った。厨房部の仕様に関しては、食品衛生管理上も十分な配慮がなされている。



生協学生食堂テラス(予想図)

## 自転車置き場の設置



駒場キャンパス構内およびその周辺に駐輪あるいは放置してある自転車数は、年々増加傾向にあった。そこで1998年5月20日に自転車駐輪台数の実態調査をおこなったところ、構内に741台、正門前と坂下門周辺にそれぞれ163台と98台あることが分った。このうち正門前と坂下門の放置自転車は、明らかに京王井の頭線「駒場東大前駅」を利用する周辺住民のものとわかるものが多く、正門付近の景観を損ねるばかりでなく、正門を出入りする車両の邪魔になっていた。教養学部は目黒区と協議の上、バレーコートと井の頭線の間の土地を目黒区に貸与し、駅利用者のために「目黒区駒場東大入口駐輪場（有料・月額2000円）」を設置することにした。また構内に自転車に対しては登録制を導入し、専用のステッカーを交付して学外のものとは区別し、台数を管理することにした。東口駐輪場は7月1日から利用がはじまり、また構内の自転車登録は、教職員と学生のものあわせて1000台（12月末の時点）に達している。この結果、正門前と坂下門周辺の放置自転車はほぼ一掃された。また登録制も今のところ円滑に運用されている。なお構内に放置されていた未登録自転車については、一時情報教育棟南側に保管し、環境整備の際に構外に搬出した。今後も、登録の推進と未登録自転車の整理を定期的に行うことにしている。

このような自転車登録制度への移行にともない、これまで駒場キャンパス構内への車両乗り入れや駐車を規定していた「東京大学教養学部構内自動車交通規則」「東京大学教養学部構内自動車交通規則実施細則」及び「教養学部正門外駐車場利用内規」を廃止し、自転車と車両の構内乗り入れなど、構内の交通規則全般を規定する「東京大学教養学部等構内交通規則」を新たに制定した。なお従来より、車両の構内乗り入れ及び駐車に関しては、駒場キャンパスの環境を良好に保つため、学部長が特に必要と認めた場合を除いて原則として禁止されている。この点に関しては変更はない。

## 5 「教養学部報」のインターネット化について

「教養学部報」は伝統ある学内広報紙です。現在では、1年間に9回——長期休暇の月を除いてほぼ毎月——発行されており、ページ数は月によりますが、4ページか8ページとなっています。

広報紙というと、学部からの一方的なメッセージが載せられているかのように思われるかも知れませんが、実は駒場のさまざまなアクティビティがそこに濃縮されており、一つの教養紙となっています。梅林に棲む虫の話、ゲーテと銀杏、など、いずれも、専門家の目を通して見ると、駒場という空間がいかに滋味に満ちたものであるかを感じさせてくれるものです。その証拠に、この学部報は教員にはよく読まれています。自分で記事を書いてみればすぐにわかるように、学部報が発行されて1週間もすると、記事を読んだ感想があちこちから聞こえてきます。

ところが、学生諸君の読者は少ないのです。最近の学生諸君は一般に新聞をあまり読まないようですので、「教養学部報」も読まれなくても仕方ないのかもしれませんが、大変残念なことです。読んでもらうためにできることはないのか？が、広報委員会のなかで何度も議論されました。

ここで少々背景となる話をします。私（広報委員会委員長）は1年生に「情報処理」の講義をしています。社会の情報環境は年々変化していますので、講義開講日に学生諸君が置かれている情報環境を知る目的でアンケート調査をしています。今秋の文科1年生に対するアンケート集計結果では、情報処理の講義開始以前に電子メールを打ったことのある学生は約70%、インターネットを見たことがあるが80%、自宅または下宿にパソコンがあるが50%でした。そのパソコンがネットワークに接続されていると答えた学生が50%いることには驚きました。すなわち、東京大学の文科1年生の4人に1人は、自宅など身近な所にネットワーク化されたパソコンがあることとなります。このように学生の環境は急速に情報化しています。

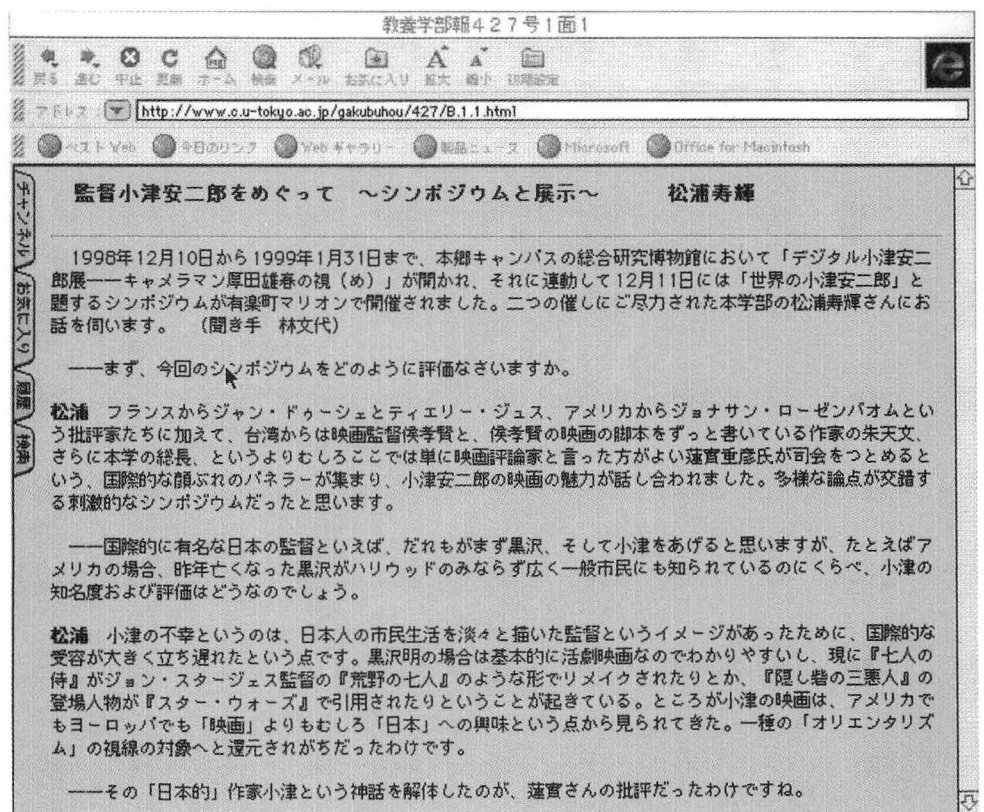
「学生のおかれている環境の情報化に 대응することで、学生諸君に「教養学部報」を読むきっかけを与えることができないか？」というアイデアを受けて、広報委員会では、「教養学部報」のインターネット（www）化について検討を始めました。最近では著者からテキストファイルで原稿を受けとってページを組むことが普通になっていますので、それをインターネットで公開することは技術的には難しいことはありません。しかし、技術が全てではありません。紙媒体の場合は発行部数が限定されていますが、インターネットでは公開しているかぎりいくらでもコピーされます。ですから、著作権の扱いが異なってきます。紙媒体の「教養学部報」は教養学部キャパス内だけで配布されていますが、インターネットでは全世界に公開することもできます。しかし、どこまで公開することが妥当なのでしょう。

このような問題について議論を重ね、一定の結論が出たため、1998年10月号から、「教養学部報」をインターネット（www）で公開するようになりました。インターネット化された「教養学部報」は、「<http://www.c.u-tokyo.ac.jp>」にある教養学部のホームページから、「情報あれこれ」、「総合文化研究科 教養学部専用のページ」、「教養学部報」と辿ることでアクセスすることができます。大手の新聞もインターネットで情報発信をしています。それは基本的には目次だけであり、内容を読むためには、結局、紙媒体の新聞を買わざるを得ません。内容を全てインターネットで読めるようにしてしまうと、紙媒体の新聞が売れなくなってしまうためです。「教養学部報」にはそのような経済的な制約がありませんので、紙媒体の「教養学部報」と全く同じものが（著者が特にインターネットでの公開を望まない場合を除いて、）インターネットから読むことができます。なお、紙媒体の配布範囲に合わせて、「教養学部報」のページにアクセスできるのはkomaba.ecc.u-tokyo.ac.jpドメイン（情報教育棟）とc.u-tokyo.ac.jpドメイン（教養学部）からのみとしています。

「教養学部報」をインターネット化すると、今後蓄積されるバックナンバーはすぐにアクセスできるようになります。興味を持っている分野が狭く、どの号にも読みたい記事がほとんどな

いために「教養学部報」を手にとらなくなっている学生がいるかもしれません。しかし、バックナンバーを眺めれば、そのような学生でも、いくつかは読みたい記事があるのではないのでしょうか。そこから、「教養学部報」に親しんでもらえるようになるならば、それもまたインターネット化の意義であると言えるのではないのでしょうか。

現在は紙媒体の学部報も以前どおり発行しています。そのため、直ちに実現はできませんが、インターネットだけで発行するにすれば、編集や発行が非常に容易になります。紙媒体では、4ページか8ページ分の紙面をちょうど埋めるだけの原稿を揃える必要がありますが、インターネットで発信すればこのような制約から解放されます。しかも、「教養学部報」の執筆者のほとんどが、FDや電子メールなどで電子化したテキストを入稿しますので、それをほぼ機械的に処理することでインターネットで公開でき、組版や印刷の手間を省き、タイムリーに記事を届けられるようになります。もちろん、紙媒体にも良い点がたくさんあります。しかし、伝統ある「教養学部報」も社会の変化から逃れることはできません。伝統のなかにある精神を確認しつつ、新しい体を創造していくことこそ、伝統を守るものに求められることなのではないのでしょうか。



---

# 付属資料1

東京大学大学院総合文化研究科で教育・研究にたずさわる教官は、所属する専攻・系、学科、部会などの一員として、あるいは個人の資格で、海外を含めた外部の研究者や研究組織と緊密な連携のもとに研究活動を行っている。その成果を共同で発表して相互理解を深め、討論を通じて研究水準のさらなる向上を目指す機会も数多く存在する。そうした多様な活動やそれに寄せられる外部からの評価を、それぞれの専門領域にのみ流通する断片的な情報にとどまらないようにするため、シンポジウム・講演会・演奏会など、招聘教授・交換教授、学外からの評価、科学研究費補助金、奨学寄付金、受託研究の一覧を以下にあげる。総合文化研究科、教養学部で教育に携わっている教官による諸外国の大学での招待講演の詳しい資料は「Ⅱ 総合文化研究科・教養学部では、誰がどのように教育・研究を行っているのか」に述べられているので、それを参照されたい。

---

## シンポジウム

| タイトル／使用言語                                                                                                                 | 会場／期日                           | 主なパネリスト                                                                                                                                                                             | 主催者                              | 刊行物 * その他            |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|----------------------|
| いま環境問題を考える<br>日本語(一部英語)                                                                                                   | 教養学部13号館1321,1322教室<br>1998.6.4 | 横田洋三(法学部教授)徳永勝士(医学部教授)板生清(工学部教授)柳沢幸雄(工学部客員教授)磯部雅彦(工学部教授)似田貝香門(文学部教授)近藤矩朗(理学部教授)松本淳(理学部助教授)樋口廣芳(農学部教授)佐藤洋平(農学部教授)松本聡(農学部教授)石見徹(経済学部教授)石弘之(教養学部教授)高橋正征(教養学部教授)山岡寛人(教育学部教諭)本間浩(薬学部助教授) | 教養学部進学情報センター                     | ビデオテープ               |
| ネイションの軌跡：シリーズ<br>「20世紀を考える」(1)                                                                                            | 教養学部13号館1323教室<br>1998.6.6      | 大澤真幸(京都市大学助教授)小熊英二(慶應大学講師)米谷匡史(青山学院女子短期大学講師)                                                                                                                                        | 教養学部総合社会科学科相関社会科学分科              |                      |
| 知の総合<br>Fröhliche Wissenschaften? Wissens-<br>diskurse der Romantik<br>ドイツ語、フランス語、英語                                      | 教養学部視聴覚ホール<br>1998.9.14-18      | 招待講演者：国外9名(ドイツ、フランス、アメリカ、オーストリア)、<br>国内4名                                                                                                                                           | 総合文化研究科<br>人文社会系研究科<br>代表者：臼井隆一郎 | 学内講演者：9名、延べ参加人数：350名 |
| "From Autonomy to Abundance:<br>Changing Beliefs about the Free<br>Labor System in Nineteenth Cen-<br>tury America"<br>英語 | 教養学部10号館3階会議室<br>1998.10.31     | Leon Fink(University of North Carolina/ Professor)Susan Levine(East Carolina University/ Professor)Lois Rita Helmbold(津田塾大学、日本女子大学Fulbright Senior Lecturer)佐々木孝弘(東京外国語大学)          | アメリカ史研究会<br>アメリカ研究資料センター         |                      |
| 異文化を旅する人々—ヨーロッパとイスラームのあいだで—                                                                                               | 教養学部13号館1313教室<br>1998.11.7     | 八尾師誠(東京外語大学教授)羽田正(東洋文化研究所教授)小松久男(人文社会系研究科教授)臼杵陽(国立民族学博物館)工藤庸子・斉藤文子・安岡治子・山内昌之・杉田英明(以上5名地域文化研究専攻)                                                                                     | 総合文化研究科地域文化研究専攻                  |                      |
| アメリカ研究資料センター第5<br>回公開シンポジウム「グローバリゼーションとアメリカ文化」                                                                            | 教養学部13号館1323教室<br>1998.11.28    | 西垣通(社会科学部研究科教授)松本健(公正貿易センター所長)山本吉宣(総合文化研究科教授)佐藤良明(総合文化研究科教授)                                                                                                                        | アメリカ研究資料センター                     |                      |

# 講演会

| 講師                  | 所属機関／職                                             | タイトル／使用言語                                                                                  | 会場／期日                              | 主催者                                                      |
|---------------------|----------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| Frank Elbe          | 駐日ドイツ大使                                            | ドイツ統一と国際関係—回顧と展望—<br>ドイツ語                                                                  | 教養学部図書館4階視<br>聴覚教室<br>1998.1.28    | 総合文化研究科地域文化研究専攻／教<br>養学部地域文化研究学科ドイツ科                     |
| Elizabeth W. Joyce  | Edinboro University of Pennsylvania<br>Professor   | Postfeminism: An Unlikely Solution<br>英語                                                   | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.5.12   | アメリカ研究資料センター                                             |
| Michael R. Hinds    | 東京大学                                               | Randall Jarrell Represents: Poems about the<br>Visual Arts<br>英語                           | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.5.20   | アメリカ研究資料センター                                             |
| Gary Okiihiro       | Cornell University<br>Professor                    | Reflections on American and Asian American<br>Studies<br>英語                                | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.6.8    | アメリカ研究資料センター                                             |
| Patricia Turner     | University of California, Davis<br>/Professor      | This Little Light of Mine: A Study of African<br>-American Quilters<br>英語                  | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.6.8    | アメリカ研究資料センター                                             |
| Darwin J. Prockop   | Thomas Jefferson University Professor and Director | コラーゲンはどのように繊維へと自己会合<br>するか？<br>英語                                                          | 教養学部16号館126/<br>127号室<br>1998.6.18 | 林 利彦                                                     |
| 後藤八郎<br>三浦 篤        | 創形美術学校修復研究所<br>研究員<br>東京大学<br>助教授                  | よみがえった公使の肖像—山本芳翠「鮫島<br>尚信像」の修復をめぐる—                                                        | 教養学部視聴覚ホ-ル<br>1998.6.19            | 教養学部美術博物館                                                |
| ハリス・シライジッチ          | ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国閣僚評議会共同<br>議長(首相職)／サラエボ大学教授        | ヨーロッパとイスラーム—ボスニアから考え<br>る<br>英語                                                            | 教養学部図書館4階視<br>聴覚教室<br>1998.6.24    | 総合文化研究科地域文化研究専攻／教<br>養学部地域文化研究学科ロシア・東欧<br>分科およびヨーロッパ・コース |
| Josef Fűrnkäs       | 慶應義塾大学客員教授                                         | ドイツにおける過去の克服<br>ドイツ語                                                                       | 教養学部8号館3階応接<br>室<br>1998.6.26      | 教養学部地域文化研究学科ドイツ分科<br>／科学研究B「現代ドイツの政治文化<br>と欧州統合」グループ     |
| Richard A. Colignon | 東京大学                                               | United States Poverty and the Urban Under-<br>class<br>英語                                  | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.6.30   | アメリカ研究資料センター                                             |
| 遠藤泰生<br>高橋均         | 東京大学                                               | カリブ広域移民プロジェクト報告会<br>「ロンドンとトロントのジャマイカ人コミ<br>ュニティ」<br>「クレオール文化とミドルクラス：ブラジ<br>ル、サルヴァドル市の調査から」 | アメリカ研究資料セン<br>ター会議室<br>1998.7.15   | アメリカ研究資料センター                                             |

| 講師                     | 所属機関／職                                                       | タイトル／使用言語                                                                            | 会場／期日                              | 主催者                                       |
|------------------------|--------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|-------------------------------------------|
| Herbert Schnädelbach   | Humboldt-Universität zu Berlin(ベルリン・フンボルト大学[ドイツ連邦共和国])教授     | ‘Sinn’ in der Geschichte? Über Grenzen des Historismus<br>ドイツ語                       | 教養学部9号館ドイツ語部会研究室<br>1998.9.15      | 科学研究費補助金基盤研究(B)<br>代表：麻生建                 |
| 高木康光                   | 科学技術振興事業団研究員                                                 | ショウジョウバエ胚細胞をモデルとした、細胞外マトリックスと神経細胞間相互作用の解析<br>日本語                                     | 教養学部16号館126/127号室<br>1998.9.16     | 林 利彦                                      |
| Renate Schlesier       | Universität-Gesamthochschule Paderborn(パダーボルン大学[ドイツ連邦共和国])教授 | Freud als Leser von Nietzsche<br>ドイツ語                                                | 教養学部10号館会議室<br>1998.10.7           | 科学研究費補助金基盤研究(B)<br>代表：猪口弘之                |
| Renate Schlesier       | Universität-Gesamthochschule Paderborn(パダーボルン大学「ドイツ連邦共和国」)教授 | Kulturwissenschaften in Deutschland-gestern und heute<br>ドイツ語                        | 教養学部視聴覚ホール<br>1998.10.14           | 超域文化科学専攻比較文学比較文化コース、地域文化研究学科ドイツ分科、日本ドイツ学会 |
| Nelson Lichtenstein    | University of Virginia<br>Professor                          | Rights Consciousness and “The Labor Question”<br>英語                                  | アメリカ研究資料センター会議室<br>1998.10.20      | アメリカ研究資料センター                              |
| Eileen Boris           | University of Virginia<br>Professor                          |                                                                                      |                                    |                                           |
| Sanford E. Marovitz    | Kent State University<br>Professor                           | Melville’s <i>Billy Budd</i> : Romantic Legacies<br>英語                               | アメリカ研究資料センター会議室<br>1998.10.23      | アメリカ研究資料センター                              |
| Mark Helbling          | University of Hawaii<br>Associate Professor                  | Recent Issues in African American Studies<br>英語                                      | アメリカ研究資料センター会議室<br>1998.11.10      | アメリカ研究資料センター                              |
| Frederick Wiseman      | ドキュメント・フィルム作家                                                | Documenting the American Institutions<br>英語                                          | 東京大学教養学部図書館視聴覚ホール<br>1998.11.16-17 | 超域文化科学専攻表象文化論コース・アメリカ研究資料センター             |
| Linda Kerber           | University of Iowa<br>/Professor                             | No Constitutional Right to be Ladies: Woman and the Obligations of Citizenship<br>英語 | アメリカ研究資料センター会議室<br>1998.12.1       | アメリカ研究資料センター                              |
| 林 俊雄                   | 創価大学<br>教授                                                   | スキタイ美術の特徴                                                                            | 教養学部視聴覚ホール<br>1998.12.4            | 教養学部美術博物館                                 |
| 林 佳龍                   | 国連大学高等研究所・フェロー                                               | Taiwan’s Democratization in comparative perspective<br>英語                            | 教養学部8号館306号室<br>1998.12.22         | 総合文化研究科地域文化研究専攻／教養学部地域文化研究学科アジア分科         |
| Konstantin O. Sarkisov | ロシア科学アカデミー東洋学研究所所長・法政大学客員教授                                  | ロシアのアジア太平洋政策研究の現状                                                                    | アメリカ研究資料センター会議室<br>1999.2.3        | アメリカ研究資料センター                              |
| Friedrich Achleitner   | ウィーン応用芸術大学教授(Hochschule für angewandte Kunst in Wien)        | ヴィーナー・グループをめぐって—朗読と討論のタベ<br>ドイツ語                                                     | 教養学部9号館312号室<br>1999.2.5           | 教養学部ドイツ語部会                                |

招聘講演

| 氏名／国籍                      | 所属研究機関／地位                             | テーマ＊その他              | 会場／期日                | 主催者                     | 共催者      |
|----------------------------|---------------------------------------|----------------------|----------------------|-------------------------|----------|
| Stephen Greenblatt<br>アメリカ | Harvard大学<br>教授                       | Hamlet in Purgatory  | 視聴覚ホール<br>1998.6.6   | 教養学部表象文化論研究室            | 京都大学国際基金 |
| Kevin Doak<br>アメリカ         | Illinois大学 (Urbana-<br>Champaign) 助教授 | Overcoming Modernity | 10号館会議室<br>1998.8.17 | 駒場フォーラム (高田康成、小<br>林宜子) |          |

## 公演・演奏会

| 会の名称              | 出演者                                           | 主な内容                                 | 会場／期日                           | 主催者      |
|-------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|----------|
| 第81回オルガン演奏会       | 武久源造(オルガン)<br>本保尚子(ソプラノ)                      | ブクステフーデ：前奏曲とフーガ<br>ヴィヴァルディ：協奏曲「春」、ほか | 900番教室<br>1998.4.23             | オルガン委員会  |
| 第82回オルガン演奏会       | 和田純子(オルガン)                                    | ケルル：郭公のカプリッチョ<br>ブルーンズ：前奏曲、ほか        | 900番教室<br>1998.5.28             | オルガン委員会  |
| 第83回オルガン演奏会       | 鈴木俊哉(リコーダー)<br>古賀裕子(チェンバロ)                    | ウッチェリーニ：シンフォニア第2番<br>伊藤弘之：サラマンダーⅡ、ほか | キャンパスプラザ多目<br>的ホール              | オルガン委員会  |
| 「書物」<br>精神の楽器としての | ジャック・レヴィ(特別出演)<br>アブドライ・ティオンガンヌ(特別出演)他        | 朗読パフォーマンス                            | キャンパスプラザ多目<br>的ホール<br>1998.7.2  | 表象文化論研究室 |
| 始まらない終わり          | 青野智子・阿部明日香・井伊あかり・石橋今日美・<br>江口優・遠藤暁子・小畠香子・杉原正子 | パフォーマンス                              | キャンパスプラザ多目<br>的ホール<br>1998.7.17 | 表象文化論研究室 |
| 第84回オルガン演奏会       | 久保田陽子(オルガン)                                   | バッハ：トッカータとフーガハ長調、<br>フーガト短調、ほか       | 900番教室<br>1999.1.30             | オルガン委員会  |

招聘教授・交換教授

| 氏名／国籍                    | 所属研究機関／地位                                                              | 受入責任者／所属                | 期間                 | プロジェクトなど                          |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------|-------------------------|--------------------|-----------------------------------|
| BANDMAN, Everett<br>アメリカ | Department of Food Science and Technology, University of California 教授 | 相関基礎科学系<br>松田良一         | 1998.3.31～5.29     | ミオシン・ロッド部分を強制発現させた培養筋細胞における筋原繊維形成 |
| DESSONS, Gérard<br>フランス  | パリ第8大学<br>教授                                                           | 超域文化科学専攻<br>ドゥヴォス・ノトリック | 1998.4.20～6.18     | 劇性とスペクタクル性                        |
| ANSARI, Ahmad<br>インド     | 物理学研究所(バーバネスワール)<br>教授                                                 | 相関基礎科学系<br>大西直毅         | 1998.5.1～1999.2.28 | 高速回転核の励起機構                        |
| A.N.Meshcheryakov<br>ロシア | ロシア国立人文大学                                                              | 大学院総合文化研究科<br>大森彌       | 1998.10.12～18      | 東京大学とロシア国立人文大学との間における学術交流に関する協定書  |

## 学外からの評価

## 受賞など

## 総合文化研究科

| 氏名     | 受賞の名称                            | 年月日     |
|--------|----------------------------------|---------|
| 牧野 淳一郎 | 1997年度林忠四郎賞(日本天文学会)              | 98.3.17 |
| 小林 寛道  | 第1回秩父宮記念スポーツ医・科学賞(日本体育協会)        | 98.3.24 |
| 繁舩 算男  | 日本ファジィ学会賞第7回論文賞(言語を尺度とした主観確率の測定) | 98.6.3  |
| 廣松 毅   | 財団法人情報通信学会第1回論文賞優秀賞(財団法人情報通信学会)  | 98.6.26 |
| 関本 弘之  | 第16回国際植物生長物質会議においての発表で朝日賞を授与された  | 98.8.17 |
| 川中子 義勝 | アマーリエ・フォン・ガリツィン賞(J・Gハーマン研究を対象に)  | 98.8.30 |
| 関本 弘之  | 日本植物学会奨励賞(社団法人日本植物学会)            | 98.9.22 |
| 保坂 一夫  | 第34回日本翻訳出版文化賞                    | 98.9.30 |

## 数理科学研究科

| 氏名     | 受賞の名称                        | 年月日     |
|--------|------------------------------|---------|
| 鈴木 淳   | 第11回日本産業技術史学会学会賞             | 98.6.20 |
| 小木曾 啓示 | 1998年度日本数学会賞建部賢弘賞(社団法人日本数学会) | 98.10.1 |
| 齋藤 毅   | 日本数学会賞代数学賞(社団法人日本数学会)        | 98.10.2 |

平成10年度 科学研究費補助金一覧

|    | 研究種目   | 研究代表者  | 官職  | 研究課題目                                    | 配分額(千円) |
|----|--------|--------|-----|------------------------------------------|---------|
| 1  | 創成的基礎  | 小牧 研一郎 | 教授  | 反陽子を用いた反物質科学                             | 228,000 |
| 2  | 国際学術   | 伊藤 亜人  | 教授  | 韓国社会における都市化の過程に関する文化人類学的研究               | 9,600   |
| 3  | 国際学術   | 松本 忠夫  | 教授  | 熱帯域におけるシロアリおよびアリ類の採餌・栄養生態                | 3,800   |
| 4  | 国際学術   | 岸野 洋久  | 助教授 | リサイクル社会の比較調査と国際協調可能性の研究                  | 9,800   |
| 5  | 国際学術   | 谷垣 真理子 | 助教授 | 返還後の香港の社会変容と周辺地域への影響に関する調査研究             | 6,400   |
| 6  | 国際学術   | 磯崎 行雄  | 助教授 | 史上最大の生物大量絶滅の原因の探求                        | 4,100   |
| 7  | 国際学術   | 川戸 佳   | 教授  | 蛋白運動とイメージングによる神経ステロイド合成の分子論的解析           | 1,400   |
| 8  | 国際学術   | 渡邊 雄一郎 | 助教授 | ウイルス感染を引金として起きる植物応答の分子生物学的解析             | 2,500   |
| 9  | 国際学術   | 高塚 和夫  | 教授  | 時間分解ZEKE光電子分光法による分子振動波束の直接観測の理論          | 1,600   |
| 10 | 国際学術   | 嶋田 正和  | 助教授 | 寄主・寄生者メタ個体群系の共進化的動態の解明                   | 3,300   |
| 11 | 国際学術   | 長谷川 壽一 | 助教授 | 人間行動と進化—進化心理学の理論と実証およびその社会的影響            | 3,000   |
| 12 | 国際学術   | 米谷 民明  | 教授  | 行列模型による弦理論の非摂動的定式化                       | 1,600   |
| 13 | 特別推進2  | 鹿児島 誠一 | 教授  | 有機導体の柔らかい格子における電子状態：物性制御から設計へ            | 65,500  |
| 14 | 特定領域A1 | 浅島 誠   | 教授  | 脊椎動物のボディープランの分子基盤                        | 18,000  |
| 15 | 特定領域A1 | 浅島 誠   | 教授  | 脊椎動物のボディープランの分子基盤                        | 56,300  |
| 16 | 特定領域A1 | 須藤 和夫  | 教授  | 生物分子モーターの多様性と同一性：総括班                     | 31,000  |
| 17 | 特定領域A1 | 須藤 和夫  | 教授  | 生物分子モーターの動的構造解析                          | 74,600  |
| 18 | 特定領域A1 | 小林 啓二  | 教授  | 特異なスピン共役系の開発と展開                          | 73,500  |
| 19 | 特定領域A2 | 谷垣 真理子 | 助教授 | ポスト返還期の香港における国家形成と中央・地方関係の展開             | 800     |
| 20 | 特定領域A2 | 瀬地山 角  | 助教授 | 南アジアと東アジアのジェンダーに関する比較研究                  | 1,200   |
| 21 | 特定領域A2 | 高塚 和夫  | 教授  | トンネル化学反応における多次元・多体効果の理論                  | 1,500   |
| 22 | 特定領域A2 | 林 利彦   | 教授  | 生体組織傾斜構造に類似の細胞培養床の作成                     | 1,700   |
| 23 | 特定領域A2 | 深津 晋   | 助教授 | 酸化層中高配向シリコン系量子ドットの高集積化と結合ドット形成によるデバイス機能化 | 1,500   |
| 24 | 特定領域A2 | 小倉 尚志  | 助教授 | 紫外共鳴ラマン分光法によるプロトンATP合成酵素の動的構造変化の追跡       | 1,900   |
| 25 | 特定領域A2 | 瀬川 浩司  | 助教授 | 導電性ポルフィリンラジカル単結晶の電解構築と機能化                | 1,500   |
| 26 | 特定領域A2 | 尾中 篤   | 助教授 | ナノ空間反応メディアによる炭素結合形成反応制御法の開発              | 2,500   |
| 27 | 特定領域A2 | 友田 修司  | 教授  | セレンのインターエレメント飽和結合                        | 2,000   |
| 28 | 特定領域A2 | 下井 守   | 教授  | 遷移金属・ホウ素二重結合を有するポリレン錯体の合成                | 2,000   |
| 29 | 特定領域A2 | 前田 京剛  | 助教授 | 非線型ジョセフソンプラズマ共鳴の研究                       | 2,000   |
| 30 | 特定領域A2 | 村田 滋   | 助教授 | 光誘起励起子移動を經由して高効率的に生成する高スピン共役電子系の創出       | 1,800   |
| 31 | 特定領域A2 | 松下 信之  | 助教授 | 長鎖アルキル基を利用した金属錯体積層構造の構築と機能発現             | 1,200   |

|    | 研究種目   | 研究代表者  | 官職  | 研究課題目                                        | 配分額(千円) |
|----|--------|--------|-----|----------------------------------------------|---------|
| 32 | 特定領域A2 | 豊島 陽子  | 助教授 | 核分裂におけるキネシン様タンパク質の役割                         | 2,000   |
| 33 | 特定領域A2 | 石浦 章一  | 教授  | アルツハイマー病発症に関わる新規プロテアーゼの検索                    | 1,800   |
| 34 | 特定領域A2 | 足立 博之  | 助手  | モータードメイン以外の機能ドメインを合わせ持つミオシン分子の検索             | 1,700   |
| 35 | 特定領域A2 | 足立 博之  | 助手  | 細胞質分裂及び細胞基質間接着のシグナルに関わる蛋白質の構造と機能             | 2,100   |
| 36 | 特定領域A2 | 金子 邦彦  | 教授  | 造血システムの数理モデル                                 | 1,600   |
| 37 | 特定領域A2 | 川口 正代司 | 助手  | ミヤコグサ根粒形成の分子遺伝学的解析                           | 3,000   |
| 38 | 特定領域A2 | 渡邊 雄一郎 | 助教授 | ウイルスの移行タンパク質を手がかりとした原形質連絡の機能解析               | 3,000   |
| 39 | 特定領域B1 | 馬淵 一誠  | 教授  | 細胞質分裂における収縮環形成・消滅のメカニズム                      | 3,900   |
| 40 | 特定領域B2 | 油井 大三郎 | 教授  | アジア太平洋地域の構造変動における米国の位置と役割に関する総合的研究           | 36,500  |
| 41 | 特定領域B2 | 山本 吉宣  | 教授  | アジア太平洋地域の安全保障体制の変容における米国の位置と役割               | 4,700   |
| 42 | 特定領域B2 | 滝田 佳子  | 教授  | アジア太平洋地域の文化変容における米国の位置と役割                    | 4,700   |
| 43 | 特定領域B2 | 松原 望   | 教授  | アジア太平洋地域における環境保護における米国の位置と役割                 | 4,700   |
| 44 | 特定領域B2 | 和田 信雄  | 助教授 | 1次元および2次元 <sup>3</sup> He流体の量子相の研究           | 38,500  |
| 45 | 特定領域B2 | 小形 正男  | 助教授 | 低次元フェルミ粒子系における特異な液体状態の理論的研究                  | 800     |
| 46 | 特定領域B2 | 風間 洋一  | 教授  | 超弦理論の非摂動的性質の研究                               | 2,800   |
| 47 | 特定領域B2 | 馬淵 一誠  | 教授  | 細胞質分裂シグナル伝達と収縮環形成のメカニズム                      | 51,000  |
| 48 | 基盤A1   | 河内 十郎  | 教授  | 知覚・認知機能の成立機序に関する心理学的・障害学的研究                  | 3,500   |
| 49 | 基盤A1   | 兵頭 俊夫  | 教授  | 新方式のγ線入射位置敏感検出器を用いた陽電子消滅2光子2次元角相関装置の開発       | 2,600   |
| 50 | 基盤A1   | 高橋 正征  | 教授  | 海水生態系の高生産性の機構解析                              | 8,400   |
| 51 | 基盤A2   | 大森 正之  | 教授  | 植物界におけるcAMP情報伝達機構の分子生物学的解析                   | 2,700   |
| 52 | 基盤A2   | 兵頭 俊夫  | 教授  | 絶縁体結晶中のボジトロニウムの研究                            | 6,400   |
| 53 | 基盤A2   | 磯崎 行雄  | 助教授 | 環太平洋造山帯における大陸縁成長プロセス                         | 1,600   |
| 54 | 基盤A2   | 松野 和彦  | 教授  | 談話的能力と4言語技能—外国語と日本語教育改善のための対照比較的基礎研究—        | 8,700   |
| 55 | 基盤A2   | 久我 隆弘  | 助教授 | 光導波路型非線形素子によるファイバー内ツインビーム発生と評価               | 1,800   |
| 56 | 基盤A2   | 小林 寛道  | 教授  | 中高齢者向け総合筋力強化トレーニングマシンシステムの構築                 | 8,200   |
| 57 | 基盤B1   | 國重 純二  | 教授  | アメリカ植民地時代に関する基礎研究—多元文化社会の新歴史批評的分析            | 1,200   |
| 58 | 基盤B1   | 佐々木 力  | 教授  | 近代科学技術の思想史的意義とその日本への導入                       | 1,300   |
| 59 | 基盤B1   | 山影 進   | 教授  | アジア太平洋地域秩序形成におけるASEANの機能                     | 3,100   |
| 60 | 基盤B1   | 廣松 毅   | 教授  | 1985年以降の産業の情報化とその効果に関する研究—国際間比較を含めた実証分析—     | 1,900   |
| 61 | 基盤B1   | 大原 雅   | 助教授 | 林床植物集団の遺伝的組成に及ぼす森林孤立化の影響の定量的評価               | 5,200   |
| 62 | 基盤B1   | 久保内 端郎 | 教授  | 英語史研究支援の異写本パラレル・テキスト・コーパス—Ancrene Wisse コーパス | 2,800   |
| 63 | 基盤B2   | 並木 頼壽  | 教授  | 近現代アジアにおける地域形成と言語文化に関する比較史的研究                | 1,500   |
| 64 | 基盤B2   | 成田 篤彦  | 教授  | イギリスの〈自己〉像および〈他者〉像構築の歴史的変遷                   | 1,500   |
| 65 | 基盤B2   | 氷上 忍   | 教授  | ランダム系の相転移とマトリックス模型                           | 800     |
| 66 | 基盤B2   | 麻生 建   | 教授  | 現代ドイツにおける哲学研究の動向と研究基盤調査                      | 1,900   |

|     | 研究種目 | 研究代表者       | 官職  | 研究課題目                                                   | 配分額(千円) |
|-----|------|-------------|-----|---------------------------------------------------------|---------|
| 67  | 基盤B2 | 浦 雅春        | 教授  | 演劇のインター・カルチャー的総合研究                                      | 2,400   |
| 68  | 基盤B2 | 長谷川 壽一      | 助教授 | 進化心理学の理論的検討とその実証—推論および認知的性差研究を中心として                     | 1,400   |
| 69  | 基盤B2 | BOCELLARI J | 教授  | 短期留学プログラムのカリキュラム開発・データベース化に向けての研究                       | 1,600   |
| 70  | 基盤B2 | 保坂 一夫       | 教授  | 現代ドイツの政治文化と欧州統合                                         | 2,500   |
| 71  | 基盤B2 | 臼井 隆一郎      | 教授  | ドイツ・ロマン派の超越言語論的研究                                       | 2,200   |
| 72  | 基盤B2 | 猪口 弘之       | 教授  | 日独における文化的セルフ・イメージの形成と展開に関する比較文化論的研究                     | 1,800   |
| 73  | 基盤B2 | 高村 忠明       | 教授  | メディアの変容と言語共同体との関係に関する国際比較研究                             | 3,500   |
| 74  | 基盤B2 | 鹿兒島 誠一      | 教授  | 有機低次元導体の密度波相における電子状態                                    | 4,400   |
| 75  | 基盤B2 | 久我 隆弘       | 助教授 | 冷却気体原子を用いた量子光学(自然発光の抑制、量子ゼノン効果、ボーズ凝縮)                   | 3,700   |
| 76  | 基盤B2 | 遠藤 泰樹       | 教授  | 炭素鎖フリーラジカルの電子構造と励起状態ダイナミクスの研究                           | 4,500   |
| 77  | 基盤B2 | 永田 敬        | 教授  | 時間分解光電子分光法による気相溶媒和系の緩和ダイナミクスの研究                         | 3,300   |
| 78  | 基盤B2 | 村田 滋        | 助教授 | 極低温マトリックス分離分光法を用いた有機化学反応素過程の研究                          | 2,700   |
| 79  | 基盤B2 | 友田 修司       | 教授  | 有機軌道論—基礎有機化学における新概念の構築                                  | 1,700   |
| 80  | 基盤B2 | 黒田 玲子       | 教授  | DNAのキラリティーを利用したDNA—リガンド相互作用の研究                          | 3,700   |
| 81  | 基盤B2 | 阿波賀 邦夫      | 助教授 | 新規低次元分子磁性体に現れるスピギャップ状態の研究                               | 2,300   |
| 82  | 基盤B2 | 菅原 正        | 教授  | ポーラロンを介した局在スピン整列系の構築                                    | 1,300   |
| 83  | 基盤B2 | 山中 桂一       | 教授  | 「外国語としての日本語」辞書および教材作成の研究                                | 3,800   |
| 84  | 基盤B2 | 山本 泰        | 教授  | 地域社会の豊かさの多元的構造と指標化の研究                                   | 2,700   |
| 85  | 基盤B2 | 阿波賀 邦夫      | 助教授 | 超高压下ファラディ法磁化率測定システムの開発                                  | 2,300   |
| 86  | 基盤B2 | 今井 知正       | 教授  | 人間的行為におけるrationalityの問題                                 | 2,100   |
| 87  | 基盤B2 | 塚本 明子       | 教授  | 英国思潮に現れた「アイデンティティ」の概念に関する学際的考察                          | 2,700   |
| 88  | 基盤B2 | 杉橋 陽一       | 教授  | 芸術のメディア的戦略に関する総合的研究—表象文化の歴史的機能分析—                       | 7,300   |
| 89  | 基盤B2 | 鈴木 英夫       | 教授  | 電子テキスト・アーカイブの構築とその文化研究への応用                              | 6,100   |
| 90  | 基盤B2 | 小宮山 進       | 教授  | 量子ホール電子系の位相干渉性とその制御                                     | 9,600   |
| 91  | 基盤B2 | 高野 穆一郎      | 教授  | 火山、熱水、堆積環境における硫黄族元素の形態と挙動                               | 9,900   |
| 92  | 基盤B2 | 小島 憲道       | 教授  | 光誘起による光・スピン多重機能性金属錯体の開発                                 | 9,500   |
| 93  | 基盤B2 | 松本 忠夫       | 教授  | 歩行型社会性昆虫の初期巣における栄養、発育制御物質及び共生微生物の伝達・作用機構                | 3,700   |
| 94  | 基盤B2 | 跡見 順子       | 教授  | ストレスタンパク質からみた身体運動の評価(その2)—不活動およびトレーニング効果の評価—            | 9,900   |
| 95  | 基盤B2 | 中澤 恒子       | 助教授 | 語彙の統語・意味情報処理—日英辞書検索支援システム構築にむけて                         | 2,000   |
| 96  | 基盤B2 | 繁樹 算男       | 教授  | グループの意思決定の数値モデルとプロセスの記述                                 | 2,400   |
| 97  | 基盤B2 | 恒吉 僚子       | 助教授 | 専門・語学統合カリキュラム・教材開発に向けての組織的日米共同研究                        | 2,400   |
| 98  | 基盤B2 | 山影 進        | 教授  | テキスト・データ分析新手法と結合したシミュレーション・システムの開発—国際関係論及び政策科学への応用を中心に— | 4,200   |
| 99  | 基盤B2 | 前田 京剛       | 助教授 | 周波数連続掃引が可能なマイクロ波・ミリ波スペクトロメータの開発                         | 4,400   |
| 100 | 基盤B2 | 黒田 玲子       | 教授  | 固体状態でのキラリティー認識反応の追跡                                     | 10,300  |
| 101 | 基盤B2 | 深津 晋        | 助教授 | 低速イオン注入複合分子線エビタキシによる単結晶シリコン・酸化物量子構造の形成                  | 6,200   |
| 102 | 基盤B2 | 尾中 篤        | 助教授 | 超効率的ポルフィリン合成用ナノメディアの開発                                  | 6,500   |

|     | 研究種目 | 研究代表者  | 官職  | 研究課題目                                          | 配分額(千円) |
|-----|------|--------|-----|------------------------------------------------|---------|
| 103 | 基盤B2 | 川戸 佳   | 教授  | 新型共焦点ビデオ顕微鏡の開発とグリアー神経交信の解析                     | 7,500   |
| 104 | 基盤C1 | 中村 雄祐  | 助教授 | 多言語社会における基礎教育に関する学際的研究—南アメリカ諸国との関連において         | 2,000   |
| 105 | 基盤C2 | 増田 一夫  | 助教授 | 20世紀フランス思想における「技術」と「非西洋」に対する視座                 | 400     |
| 106 | 基盤C2 | 田中 純   | 助教授 | 世紀転換期ウィーンにおける装飾とセクシュアリティ—性とその表象に関する思想史的研究—     | 500     |
| 107 | 基盤C2 | 斎藤 兆史  | 助教授 | 創作文体論の発信型英語教育への応用                              | 500     |
| 108 | 基盤C2 | 角和 善隆  | 助手  | 層状チャート相に見られる生物擾乱構造に基づく2.5億年前の海洋古環境の変動          | 100     |
| 109 | 基盤C2 | 北川 東子  | 助教授 | 解釈学的伝統において「翻訳論」が果たした哲学的役割にかんする研究               | 500     |
| 110 | 基盤C2 | 宮本 久雄  | 教授  | ヘブライ思想・ギリシア教父と現代思潮との比較思考研究とそれに基づく新倫理学の構築       | 500     |
| 111 | 基盤C2 | 黒住 眞   | 教授  | 日本倫理想史における中国文化要素—中国思想・漢学・漢文等の生成・位置・変容          | 1,000   |
| 112 | 基盤C2 | 伊藤 亜人  | 教授  | 日本における内発型農村開発の文化人類学的研究—長野県野沢の事例—               | 900     |
| 113 | 基盤C2 | 木畑 洋一  | 教授  | イギリス帝国における脱植民地化過程の比較研究                         | 500     |
| 114 | 基盤C2 | 小川 浩   | 教授  | 後期古英語作者不詳説教散文作品群に関するテキストと言語の研究                 | 700     |
| 115 | 基盤C2 | 山本 史郎  | 教授  | 文学作品間の影響関係のコンピュータによる解析方法の確立                    | 700     |
| 116 | 基盤C2 | 丹治 愛   | 教授  | 『ドラキュラ』の文化研究：19世紀末イギリスの外国恐怖症                   | 900     |
| 117 | 基盤C2 | 高田 康成  | 教授  | 英文学研究における「近代」の言説に関する表象文化論考察                    | 800     |
| 118 | 基盤C2 | 林 文代   | 教授  | 英米における言語文化政策の比較研究                              | 1,000   |
| 119 | 基盤C2 | 今橋 映子  | 助教授 | 1930年代バリと外国人芸術家—「バリ神話」の変容と都市表象—                | 800     |
| 120 | 基盤C2 | 古城 佳子  | 助教授 | 1990年代における経済のグローバル化と国家の調整政策に関する先進国比較           | 900     |
| 121 | 基盤C2 | 米谷 民明  | 教授  | 超弦理論の非摂動的定式化                                   | 1,000   |
| 122 | 基盤C2 | 大西 直毅  | 教授  | 原子核の回転運動とそれに伴う励起機構                             | 600     |
| 123 | 基盤C2 | 池上 高志  | 助教授 | ゲームにおける内部モデルの生成とダイナミクスの研究                      | 1,100   |
| 124 | 基盤C2 | 金子 邦彦  | 教授  | 大自由度カオス系の多重アトラクターと履歴ダイナミクス                     | 1,200   |
| 125 | 基盤C2 | 錦織 紳一  | 助教授 | シアノ基架橋多次元骨格金属錯体ホストの構造とゲスト分子の動的挙動に関する基礎研究       | 800     |
| 126 | 基盤C2 | 泉岡 明   | 助手  | 磁性有機分子の高機能化と集合化                                | 900     |
| 127 | 基盤C2 | 小川 桂一郎 | 助教授 | 結晶中におけるスチルベン型分子の配座変換                           | 800     |
| 128 | 基盤C2 | 嶋田 正和  | 助教授 | 安定からカオスへ：1寄主—2寄生蜂実験系のニッチ分化とカオス生成機構の解析          | 1,100   |
| 129 | 基盤C2 | 深津 晋   | 助教授 | 浅い量子井戸ポテンシャルを利用したシリコン系太陽電池の長波長吸収・高起電力化         | 1,000   |
| 130 | 基盤C2 | 船渡 和男  | 助手  | 子どもの筋力の発育・発達に関する研究～骨年齢による動的筋力の評価とトレーニング効果の可能性～ | 700     |
| 131 | 基盤C2 | 小堀 かおる | 助手  | 筋の“伸縮”が骨格筋の生理学的状況に果たす役割                        | 800     |
| 132 | 基盤C2 | 荒井 良雄  | 教授  | わが国における全国スケールの人口移動の実態解明に関する研究                  | 1,700   |
| 133 | 基盤C2 | 鈴木 賢次郎 | 教授  | コンピュータ・ネットワークによる心的切断テスト                        | 600     |
| 134 | 基盤C2 | 大勝 孝司  | 助教授 | マルチエージェント・アプローチによる外国為替市場のモデルの構築と分析             | 700     |
| 135 | 基盤C2 | 村田 純一  | 教授  | 意識—その科学と現象学—                                   | 1,000   |
| 136 | 基盤C2 | 石光 泰夫  | 教授  | 身体の理論に基づく舞踊の総合的研究                              | 1,800   |
| 137 | 基盤C2 | 丹野 義彦  | 助教授 | 健常者の妄想的観念の研究：精神分裂病の妄想との比較研究と発生論的研究             | 1,200   |
| 138 | 基盤C2 | 岩本 通弥  | 助教授 | 戦没者祭祀と祖先観の変容に関する民俗学的研究—新潟県佐渡の墓碑・忠魂碑・護国神社—      | 600     |

|     | 研究種目 | 研究代表者  | 官職  | 研究課題目                                    | 配分額(千円) |
|-----|------|--------|-----|------------------------------------------|---------|
| 139 | 基盤C2 | 村田 雄二郎 | 助教授 | 中華民国期の中国・チベット関係                          | 800     |
| 140 | 基盤C2 | 笠原 順路  | 助教授 | 18世紀から19世紀にかけてのイギリス文学における旅行記の研究          | 900     |
| 141 | 基盤C2 | 久保内 端郎 | 教授  | 「英語散文の連続性」の検証と異写本テキスト比較研究—Wulfstan写本を中心に | 1,900   |
| 142 | 基盤C2 | 松村 剛   | 助教授 | 言語地理学的・文献学的方法による中世フランス末期武勲詩研究            | 2,100   |
| 143 | 基盤C2 | 竹内 信夫  | 教授  | 宝島寺所蔵の寂巖悉曇学資料に関する総合的研究                   | 1,900   |
| 144 | 基盤C2 | 石井 明   | 教授  | 戦後中国の対日政策形成                              | 1,000   |
| 145 | 基盤C2 | 吉岡 大二郎 | 教授  | 二層量子ホール系の輸送現象における電子相関効果の研究               | 1,300   |
| 146 | 基盤C2 | 矢野 英雄  | 助手  | 1次元メゾポーラス中の <sup>3</sup> He強相関フェルミ液体     | 2,500   |
| 147 | 基盤C2 | 浅野 攝郎  | 教授  | 遷移金属合金・多層膜の磁気光学効果の理論的研究                  | 1,700   |
| 148 | 基盤C2 | 小形 正男  | 助教授 | 強い電子相関を持つ異方的超伝導体中の磁束状態に関する理論的研究          | 2,100   |
| 149 | 基盤C2 | 小河 正基  | 助教授 | 2次元マントル大循環モデル構築へ向けて—マントル進化におけるリソスフェアの役割— | 1,100   |
| 150 | 基盤C2 | 染田 清彦  | 助教授 | 化学反応の統計的振舞の発現機構の解明                       | 1,000   |
| 151 | 基盤C2 | 松尾 基之  | 助教授 | メスバウアー分光法による河川底質中の鉄の状態分析を用いた河川環境分析       | 2,400   |
| 152 | 基盤C2 | 池内 昌彦  | 助教授 | シアノバクテリア(ラン藻)の光適応現象にかかわる遺伝子の探索と応答機構の解析   | 2,300   |
| 153 | 基盤C2 | 箸本 春樹  | 助教授 | 急速凍結法と免疫細胞化学的方法を用いた葉緑体分裂リングの構造解析         | 2,800   |
| 154 | 基盤C2 | 永田 淳嗣  | 助教授 | 都市化・産業化の進展と周辺地域の資源利用に関する東南アジア・日本比較研究     | 900     |
| 155 | 基盤C2 | 繁桝 算男  | 教授  | 因果関係を同定するための共分散構造モデルのベイズ的分析              | 1,700   |
| 156 | 基盤C2 | 丹羽 清   | 教授  | 革新的研究開発の構想立案機構の研究                        | 700     |
| 157 | 基盤C2 | 豊島 陽子  | 助教授 | 運動発生におけるキネシン頸部の構造変化                      | 2,500   |
| 158 | 基盤C2 | 石田 英敬  | 教授  | ＜社会のデイスクール分析＞に談話分析がもたらす理論と方法についての研究      | 2,200   |
| 159 | 萌芽的  | 内野 儀   | 助教授 | エイズと1980年代アメリカ演劇の研究                      | 500     |
| 160 | 萌芽的  | 中村 健之介 | 教授  | 明治期日本人正教徒に関する調査                          | 800     |
| 161 | 萌芽的  | 遠藤 泰生  | 助教授 | 1790年代から1880年代のアメリカ合衆国における太平洋像の変遷        | 500     |
| 162 | 萌芽的  | 足立 信彦  | 助教授 | ドイツ文学における他者としての「イスラム的なもの」の研究             | 500     |
| 163 | 萌芽的  | 酒井 哲哉  | 助教授 | 戦後日本における国際秩序論の形成と展開                      | 500     |
| 164 | 萌芽的  | 鹿児島 誠一 | 教授  | 有機伝導体の制御微細構造の作成                          | 600     |
| 165 | 萌芽的  | 小林 啓二  | 教授  | 自己修復能を有するデンドリマー型超分子の合成と機能化               | 600     |
| 166 | 萌芽的  | 兵頭 俊夫  | 教授  | 異方性結晶中のボジトロニウムの四重極モーメントの探索               | 2,100   |
| 167 | 萌芽的  | 阿波賀 邦夫 | 助教授 | 高スピン金属錯体クラスターに対する異種金属ドーピング               | 1,000   |
| 168 | 萌芽的  | 川口 正代司 | 助手  | マメ科植物ミヤコグサの分子遺伝学的解析の基盤形成                 | 800     |
| 169 | 萌芽的  | 和田 信雄  | 助教授 | メゾポーラス多孔体の蓄冷・熱交換器開発                      | 1,400   |
| 170 | 奨励A  | 徳盛 誠   | 講師  | 「中世日本紀」研究—本居宣長『古事記伝』批判に向けて               | 500     |
| 171 | 奨励A  | 河合 祥一郎 | 助教授 | エリザベス朝に於ける変装と主体の研究                       | 1,100   |
| 172 | 奨励A  | 庄司 宏子  | 助手  | 世紀転換期のアメリカ文化諸相における優生学パラダイムの浸透に関する研究      | 400     |
| 173 | 奨励A  | 坪井 栄治郎 | 助教授 | 全文データベースに基づく日英述語意味構造における主観化現象の認知的対照研究    | 500     |
| 174 | 奨励A  | 榎本 泰子  | 助手  | 近代中国における西洋音楽：思想・文化史的考察                   | 800     |

|     | 研究種目 | 研究代表者    | 官職  | 研究課題目                                                        | 配分額(千円) |
|-----|------|----------|-----|--------------------------------------------------------------|---------|
| 175 | 奨励A  | 道垣内 弘人   | 助教授 | 民法解釈論における正当化概念としての法典外部的要素と法典内部的要素                            | 800     |
| 176 | 奨励A  | 木宮 正史    | 助教授 | ポスト冷戦と朝鮮半島：韓国における民主化・「世界化」と北朝鮮の「開放化」                         | 700     |
| 177 | 奨励A  | 田嶋 直樹    | 助手  | 中性子過剰核の変形と対相関                                                | 900     |
| 178 | 奨励A  | 佐々 真一    | 助教授 | 一分子系における非平衡熱力学                                               | 700     |
| 179 | 奨励A  | 國場 敦夫    | 助教授 | ベーテ仮説法の数理                                                    | 700     |
| 180 | 奨励A  | 鈴木 勝彦    | 助手  | レニウム－オスミウム年代測定法を用いた金属鉱床の生成過程の探索：生成年代並びに鉱床構成物質の起源             | 1, 000  |
| 181 | 奨励A  | 今久保 達郎   | 助手  | 分子末端に結晶構造制御のための相互作用部位を導入した新規分子性伝導体の開発                        | 900     |
| 182 | 奨励A  | 関本 弘之    | 助手  | ミカヅキモの有性的細胞分裂を誘起する活性物質の特性解析                                  | 800     |
| 183 | 奨励A  | 村田 隆     | 助手  | 植物細胞分裂予定位置より伸長するアクチンの電子顕微鏡による解析                              | 900     |
| 184 | 奨励A  | 足立 博之    | 助手  | 細胞性粘菌を用いた細胞質分裂シグナルの解明                                        | 1, 000  |
| 185 | 奨励A  | 岡本 拓司    | 講師  | 日本における電気事業再編成以前の電力周波数統一計画の変遷                                 | 600     |
| 186 | 奨励A  | 八田 秀雄    | 助教授 | 運動が乳酸輸送担体の発現と機能に与える影響                                        | 500     |
| 187 | 奨励A  | 杉田 正明    | 助手  | フットスチッチを用いたLT判別法の確立とエネルギー消費量の妥当性とその応用                        | 700     |
| 188 | 奨励A  | 増原 英彦    | 助手  | 多様な並行オブジェクトモデルをサポートする言語処理系の研究                                | 500     |
| 189 | 奨励A  | 植田 一博    | 助手  | 科学的実践における問題解決過程と協同の分析および確率ネットワークによるモデル化                      | 500     |
| 190 | 奨励A  | 並木 誠     | 助手  | 線形相補性問題に対する組合せ的なアルゴリズムの研究                                    | 700     |
| 191 | 奨励A  | 柳澤 修一    | 助手  | 新規なZnフィンガー型DNA結合ドメインを有する転写因子群の構造と機能                          | 1, 000  |
| 192 | 奨励A  | 瀬地山 角    | 助教授 | 東アジアの組織と家族規範に関する比較研究                                         | 1, 000  |
| 193 | 奨励A  | 市野川 容孝   | 助教授 | 19世紀以降のドイツと日本における近代医療制度の確立過程に関する比較研究                         | 600     |
| 194 | 奨励A  | 恒吉 僚子    | 助教授 | 日本の教育と多文化共存時代の「共同体」の模索—アメリカとの比較研究—                           | 1, 100  |
| 195 | 奨励A  | 伊藤 徳也    | 助教授 | 近代中国における「生活の芸術」論—周作人、林語堂、江紹原らによる提唱とその展開                      | 700     |
| 196 | 奨励A  | 矢口 祐人    | 助教授 | 19世紀の北海道における西洋建築と米国のパターンブックスに関する基礎的研究                        | 1, 400  |
| 197 | 奨励A  | 廣田 篤彦    | 助手  | エリザベス朝英文学におけるケルト地域の表象に関する考察                                  | 1, 100  |
| 198 | 奨励A  | 李 孝徳     | 助手  | 東アジアの近代化における文学運動と言文一致運動—19世紀後半から20世紀初頭における日本・朝鮮・中国の言語表現と言語改革 | 1, 600  |
| 199 | 奨励A  | 加藤 淳子    | 助教授 | 日本における連立政権の形成・政党の連合をめぐる理論的・実証的研究                             | 800     |
| 200 | 奨励A  | 樋口 三郎    | 助手  | 場の理論のグラフ理論への応用                                               | 1, 000  |
| 201 | 奨励A  | 齋藤 晴雄    | 助手  | 陽電子消滅法とESR法を組み合わせた表面常磁性中心の研究                                 | 900     |
| 202 | 奨励A  | 佃 達哉     | 助手  | クラスター負イオンの電子構造と化学反応過程                                        | 1, 900  |
| 203 | 奨励A  | 小松 徳太郎   | 助手  | 分子性モット絶縁体のフィリング制御                                            | 1, 500  |
| 204 | 奨励A  | 藤田 渉     | 助手  | 有機無機複合層状磁性体における溶媒誘起構造相転移に関する研究                               | 1, 300  |
| 205 | 奨励A  | 兵藤 晋     | 助手  | 肺魚類の脳下垂体神経葉ホルモン：前駆体構造と生理的役割                                  | 1, 400  |
| 206 | 奨励A  | 篠原 稔     | 助手  | VO <sub>2</sub> slow componentの機序を筋音図と近赤外分光法を用いて解明する         | 1, 000  |
| 207 | 奨励A  | 和久 貴洋    | 助手  | ジュニア期のスポーツ活動と防衛体力に関する研究                                      | 1, 000  |
| 208 | 奨励A  | 田原 裕子    | 助手  | 高齢期における居住地移動の空間構造の解明とモデル化に関する研究                              | 800     |
| 209 | 奨励A  | 山口 泰     | 助教授 | 法線ベクトル曲面を用いた曲面間交線算出法                                         | 1, 300  |
| 210 | 奨励A  | 岩本(木原)昌子 | 助手  | 大腸菌ATP合成酵素：γサブユニット変異酵素を用いたエネルギー共役機構の解明                       | 1, 100  |
| 211 | 奨励A  | 木本 哲也    | 助手  | 中枢神経系に於ける神経—グリア間情報伝達過程の可視化解析                                 | 800     |

|     | 研究種目         | 研究代表者    | 官職          | 研究課題目                                   |       |
|-----|--------------|----------|-------------|-----------------------------------------|-------|
| 212 | 特別研究員<br>奨励費 | 安田 静     | 特別研究員 (PD)  | バレエの歴史                                  | 1,200 |
| 213 | 特別研究員<br>奨励費 | 大川 祐司    | 特別研究員 (DC1) | 非可換群の対称性を持つ様々な系における非摂動効果の研究             | 900   |
| 214 | 特別研究員<br>奨励費 | 池原 径夫    | 特別研究員 (PD)  | ストリング理論の非摂動的定式化                         | 1,300 |
| 215 | 特別研究員<br>奨励費 | 石村 源生    | 特別研究員 (PD)  | 知覚運動間協応過程において運動が知覚情報処理に及ぼす効果            | 1,200 |
| 216 | 特別研究員<br>奨励費 | 久門 正人    | 特別研究員 (PD)  | 光ファイバーと幾何学模型に対する可積分方程式の応用               | 1,200 |
| 217 | 特別研究員<br>奨励費 | 門前 一姫    | 特別研究員 (DC1) | ラン藻における光合成と呼吸の光情報伝達系による調節制御             | 900   |
| 218 | 特別研究員<br>奨励費 | 檀 一平太    | 特別研究員 (DC1) | 遺伝子検索と超高感度イメージングによる大脳神経回路網形成における分子機構の解析 | 900   |
| 219 | 特別研究員<br>奨励費 | 鈴木 穰     | 特別研究員 (DC1) | 完全長cDNAライブラリーの作製法を用いたDRD4プロモーター領域の解析    | 900   |
| 220 | 特別研究員<br>奨励費 | 新井 秀明    | 特別研究員 (DC1) | 筋萎縮にともない特異的に減少する $\alpha$ クリスタリンB鎖の機能   | 900   |
| 221 | 特別研究員<br>奨励費 | 望月 聡     | 特別研究員 (DC1) | 失行＝失認症候の神経心理学的検討                        | 900   |
| 222 | 特別研究員<br>奨励費 | 阪口 功     | 特別研究員 (DC1) | 地球環境問題を巡る国際レジームの形成と変容                   | 700   |
| 223 | 特別研究員<br>奨励費 | 石倉 義博    | 特別研究員 (DC1) | 19世紀イギリスにおける家族の規範と表象についての社会学的研究         | 500   |
| 224 | 特別研究員<br>奨励費 | 長谷川 悦夫   | 特別研究員 (DC1) | 中央アメリカ地域先スペイン期の考古学調査に基づく研究              | 900   |
| 225 | 特別研究員<br>奨励費 | 芹田 浩司    | 特別研究員 (DC1) | 発展途上国の産業発展における多国籍企業の役割                  | 900   |
| 226 | 特別研究員<br>奨励費 | 渡邊 日日    | 特別研究員 (DC1) | シベリア社会人類学。特にブリアート社会の国家・民族・イデオロギーをめぐる諸問題 | 900   |
| 227 | 特別研究員<br>奨励費 | 堀田 智洋    | 特別研究員 (PD)  | 超対称理論の非摂動論的效果の研究                        | 1,300 |
| 228 | 特別研究員<br>奨励費 | 二宮 史郎    | 特別研究員 (PD)  | マイクロキャピラリー薄膜を用いた中空原子とその生成過程の研究          | 1,200 |
| 229 | 特別研究員<br>奨励費 | 重田(米谷)園江 | 特別研究員 (PD)  | ミシェル・フーコーを中心とする社会・政治思想、社会哲学の研究          | 800   |
| 230 | 特別研究員<br>奨励費 | 山上 浩嗣    | 特別研究員 (PD)  | バスカルにおける信仰への接近                          | 800   |
| 231 | 特別研究員<br>奨励費 | 小松 輝久    | 特別研究員 (PD)  | 粉粒多体系の破壊流動現象                            | 1,300 |

|     | 研究種目         | 研究代表者   | 官職          | 研究課題目                                    |       |
|-----|--------------|---------|-------------|------------------------------------------|-------|
| 232 | 特別研究員<br>奨励費 | 小久保 英一郎 | 特別研究員 (PD)  | 原始太陽系における惑星形成過程の研究                       | 1,300 |
| 233 | 特別研究員<br>奨励費 | 浅野 雅子   | 特別研究員 (PD)  | 量子重力理論及び弦理論の幾何学的性質                       | 1,200 |
| 234 | 特別研究員<br>奨励費 | 葛山 泰央   | 特別研究員 (PD)  | 西欧近代社会における自己を語る言説(主体)の歴史                 | 800   |
| 235 | 特別研究員<br>奨励費 | 畠山 聡    | 特別研究員 (PD)  | フッサール現象学における歴史と言語の問題                     | 800   |
| 236 | 特別研究員<br>奨励費 | 鳥井 寿夫   | 特別研究員 (DC2) | 気相における中性原子のボーズ凝縮の実現及びその特異な性質の解明          | 900   |
| 237 | 特別研究員<br>奨励費 | 三宅 芳夫   | 特別研究員 (DC2) | 戦後思想の再検討―「戦後啓蒙」と「第一次戦後派」の緊張関係を中心に        | 900   |
| 238 | 特別研究員<br>奨励費 | 劉 夏如    | 特別研究員 (DC2) | 受身の近代：植民地台湾の社会体制と法                       | 700   |
| 239 | 特別研究員<br>奨励費 | 三苫 利幸   | 特別研究員 (PD)  | マックス・ヴェーバーと20世紀社会理論の起源                   | 900   |
| 240 | 特別研究員<br>奨励費 | 松本 由紀子  | 特別研究員 (DC2) | 機械としての人間の声と欲望                            | 900   |
| 241 | 特別研究員<br>奨励費 | 北野 晴久   | 特別研究員 (DC2) | マイクロ波応答による高温超伝導体及びモット絶縁体の電荷ダイナミクスの研究     | 900   |
| 242 | 特別研究員<br>奨励費 | 秋山 英三   | 特別研究員 (PD)  | ゲーム理論の動的生態系型システムへの拡張                     | 900   |
| 243 | 特別研究員<br>奨励費 | 太田 里子   | 特別研究員 (DC2) | 近接場顕微鏡の開発と生細胞の膜裏打ち構造の動的変化の制御機構の研究        | 900   |
| 244 | 特別研究員<br>奨励費 | 丸山 康司   | 特別研究員 (DC2) | 人間―自然関係の再構成                              | 900   |
| 245 | 特別研究員<br>奨励費 | 金 柄徹    | 特別研究員 (DC2) | 近代における漁民の社会・文化の変容に関する人類学的考察―日本の船世帯民を中心に― | 900   |
| 246 | 特別研究員<br>奨励費 | 澤田 康幸   | 特別研究員 (DC2) | 不確実性下における人的資本投資とジェンダー：アジア諸国の比較分析         | 900   |
| 247 | 特別研究員<br>奨励費 | 綾部 広則   | 特別研究員 (PD)  | 科学技術の階層構造と発展過程～巨大及び零細科学技術の比較研究～          | 900   |
| 248 | 特別研究員<br>奨励費 | 東 浩紀    | 特別研究員 (DC2) | ジャック・デリダの思想における精神分析の理論的地位について            | 500   |
| 249 | 特別研究員<br>奨励費 | 三浦 徹    | 特別研究員 (DC2) | 熱帯域におけるテングシロアリ亜科の行動生態学的・進化生物学的研究         | 900   |
| 250 | 特別研究員<br>奨励費 | 日原 由香子  | 特別研究員 (PD)  | シアノバクテリアの光合成・呼吸の環境適応に関する分子生物学的研究         | 900   |
| 251 | 特別研究員<br>奨励費 | 森川 美絵   | 特別研究員 (DC1) | 高齢者介護の国際比較―ジェンダーの視点から見た福祉多元主義            | 900   |

|     | 研究種目         | 研究代表者    | 官職         | 研究課題目                                    |       |
|-----|--------------|----------|------------|------------------------------------------|-------|
| 252 | 特別研究員<br>奨励費 | 田中 祐理子   | 特別研究員(DC1) | 科学言語による身体把握の現状と病の概念の相関について               | 500   |
| 253 | 特別研究員<br>奨励費 | 梶川 祥世    | 特別研究員(DC1) | 霊長類の音声コミュニケーションにおける情報伝達とその認知機構           | 900   |
| 254 | 特別研究員<br>奨励費 | 藤堂 史明    | 特別研究員(DC1) | 環境資源管理制度と持続可能な経済システム                     | 900   |
| 255 | 特別研究員<br>奨励費 | 八森 正泰    | 特別研究員(DC1) | 複体のシェラビリティーとその周辺                         | 900   |
| 256 | 特別研究員<br>奨励費 | 岸本 洋介    | 特別研究員(DC1) | シリコン系混晶量子構造における光学物性制御                    | 900   |
| 257 | 特別研究員<br>奨励費 | 片岡 直人    | 特別研究員(DC1) | 数理モデルによる言語的なルールやコーディングの生成過程              | 900   |
| 258 | 特別研究員<br>奨励費 | 大谷 宗久    | 特別研究員(DC1) | 量子色力学とその有効理論における物理的自由度の取り扱いと変分法についての研究   | 900   |
| 259 | 特別研究員<br>奨励費 | 野口 立彦    | 特別研究員(DC1) | Xenopus卵を用いたアクチン細胞骨格の調節機構の研究             | 900   |
| 260 | 特別研究員<br>奨励費 | 朴 珉玄     | 特別研究員(DC1) | 国際的都市システムにおける地方都市の国際化                    | 900   |
| 261 | 特別研究員<br>奨励費 | 岡林 浩嗣    | 特別研究員(DC1) | アフリカツメガエルのアピロゲン受容体の遺伝子クローニングと生物学的機能の解析   | 900   |
| 262 | 特別研究員<br>奨励費 | 前川 清人    | 特別研究員(DC1) | 東南アジア・オセアニア域におけるオオゴキブリ亜科の分子系統及び進化生態学的研究  | 900   |
| 263 | 特別研究員<br>奨励費 | 大石 高志    | 特別研究員(PD)  | 現代南アジアを事例としたイスラーム復興政治運動の史的研究             | 800   |
| 264 | 特別研究員<br>奨励費 | 東田 範子    | 特別研究員(DC1) | 中央アジア五ヶ国における「民俗音楽」の制度化とその受容の過程           | 900   |
| 265 | 特別研究員<br>奨励費 | 小林 香代    | 特別研究員(PD)  | 社会から経験へー東京におけるエイサー活動と「沖縄」解釈              | 800   |
| 266 | 特別研究員<br>奨励費 | 富重 道雄    | 特別研究員(DC2) | アンカータンパク質による膜タンパク質の機能制御メカニズムの研究          | 900   |
| 267 | 特別研究員<br>奨励費 | 今泉(安楽)温子 | 特別研究員(PD)  | ミヤコグサ・ミヤコグサ菌共生変異体を用いた根粒形成時の宿主防御応答抑制機構の研究 | 1,200 |
| 268 | 特別研究員<br>奨励費 | 金井 雅之    | 特別研究員(PD)  | 判断における視点の違いと規範・倫理の生成                     | 800   |
| 269 | 特別研究員<br>奨励費 | 佐藤 仁     | 特別研究員(PD)  | 発展途上国における公有地管理と農村開発                      | 1,200 |
| 270 | 特別研究員<br>奨励費 | 笠原 賢洋    | 特別研究員(PD)  | ラン藻のアデニル酸シクラーゼCyaCの機能解析                  | 1,200 |
| 271 | 特別研究員<br>奨励費 | 松永 友有    | 特別研究員(PD)  | イギリスにおける自由党急進派の政策的特質                     | 800   |

|     | 研究種目         | 研究代表者  | 官職         | 研究課題目                                |       |
|-----|--------------|--------|------------|--------------------------------------|-------|
| 272 | 特別研究員<br>奨励費 | 城石 正弘  | 特別研究員(PD)  | 可積分な1次元電子系模型の研究                      | 1,200 |
| 273 | 特別研究員<br>奨励費 | 佐久間 雅  | 特別研究員(PD)  | 理想グラフにおける強い予想に関する点彩色構造について           | 1,200 |
| 274 | 特別研究員<br>奨励費 | 佐藤 賢一  | 特別研究員(PD)  | 日本数学史：特に関孝和の数学とその時代背景についての研究         | 1,200 |
| 275 | 特別研究員<br>奨励費 | 武藤 知己  | 特別研究員(PD)  | 弦理論における時空の構造の研究                      | 1,200 |
| 276 | 特別研究員<br>奨励費 | 鈴木 美智子 | 特別研究員(PD)  | 近代日本における女性自己形成小説に関する比較文学・社会文化史的考察    | 800   |
| 277 | 特別研究員<br>奨励費 | 佐藤 正則  | 特別研究員(PD)  | ポリシェヴィキの人間観と宇宙観、その形成過程およびスターリニズムへの影響 | 800   |
| 278 | 特別研究員<br>奨励費 | 久木元 真吾 | 特別研究員(PD)  | "Life"の比較社会学—生命保険と〈安全性〉をめぐる—         | 1,100 |
| 279 | 特別研究員<br>奨励費 | 山根 徹也  | 特別研究員(PD)  | 近代ドイツにおける祭りの社会史                      | 800   |
| 280 | 特別研究員<br>奨励費 | 坪井 禪吾  | 特別研究員(PD)  | ペーテ仮説法の数理—可積分な場の理論と差分方程式系との関連において    | 1,200 |
| 281 | 特別研究員<br>奨励費 | 坪井 隆   | 特別研究員(DC2) | 擬二次元超伝導体における磁束系の相転移とダイナミクス           | 800   |
| 282 | 特別研究員<br>奨励費 | 斎藤 安貴子 | 特別研究員(DC2) | DNAの塩基配列認識機構の解明                      | 900   |
| 283 | 特別研究員<br>奨励費 | 北尾 拓洋  | 特別研究員(DC2) | 非摂動的なポテンシャルの生成や双対性を用いた超対称性の場の理論      | 900   |
| 284 | 特別研究員<br>奨励費 | 渡邊 敦彦  | 特別研究員(DC2) | 現代ヨーロッパにおける映画と舞台表象の関係                | 500   |
| 285 | 特別研究員<br>奨励費 | 鈴木 良和  | 特別研究員(DC2) | ミオシンの原子構造変化を実時間で検出する新たなアプローチ         | 900   |
| 286 | 特別研究員<br>奨励費 | 徳江 佐和子 | 特別研究員(DC2) | ペルー北部、地方発展期における国家形成過程の研究             | 900   |
| 287 | 特別研究員<br>奨励費 | 安部 淳一  | 特別研究員(DC2) | 半導体発光素子を用いたサブボアソン光の研究                | 900   |
| 288 | 特別研究員<br>奨励費 | 高野 和敬  | 特別研究員(DC2) | 両生類卵における背側決定因子の同定                    | 900   |
| 289 | 特別研究員<br>奨励費 | 金杉 武司  | 特別研究員(DC2) | 現代英米哲学における、認知科学の基礎論としての心の哲学を批判的に研究する | 500   |
| 290 | 特別研究員<br>奨励費 | 坂野 鉄也  | 特別研究員(DC2) | パラグアイにおけるメスティソ社会の歴史的研究               | 500   |
| 291 | 特別研究員<br>奨励費 | 中野 剛充  | 特別研究員(DC2) | 現代コミュニタリアニズムの可能性—チャールズ・テイラーの倫理思想—    | 900   |

|     | 研究種目         | 研究代表者  | 官職         | 研究課題目                                         |       |
|-----|--------------|--------|------------|-----------------------------------------------|-------|
| 292 | 特別研究員<br>奨励費 | 宮本 大人  | 特別研究員(DC2) | 日本漫画の歴史研究—明治期から昭和戦中期まで—                       | 900   |
| 293 | 特別研究員<br>奨励費 | 小沢 哲史  | 特別研究員(DC2) | 社会的参照現象と乳児の認知発達                               | 900   |
| 294 | 特別研究員<br>奨励費 | 上原 泉   | 特別研究員(DC2) | 潜在記憶と顕在記憶のメカニズムと発達過程                          | 900   |
| 295 | 特別研究員<br>奨励費 | 伊藤 正子  | 特別研究員(DC2) | 国家と民族の関係、異なる国家に住む同一民族の関係を中越国境の少数民族を例に研究       | 900   |
| 296 | 特別研究員<br>奨励費 | 山下 範久  | 特別研究員(DC1) | 世界史的文脈における近世的地域システムの比較研究                      | 500   |
| 297 | 特別研究員<br>奨励費 | 阿部 克則  | 特別研究員(DC1) | ガット/WTOダンピング防止税制度の国際経済法上の機能                   | 900   |
| 298 | 特別研究員<br>奨励費 | 濱崎 加奈子 | 特別研究員(DC1) | 日本の古典芸能における「芸」—新たな身体論の地平を拓くために—               | 900   |
| 299 | 特別研究員<br>奨励費 | 土屋 良重  | 特別研究員(DC1) | 固有ジョセフソン接合アレーにおける高周波特性の研究                     | 900   |
| 300 | 特別研究員<br>奨励費 | 黒田 啓行  | 特別研究員(DC1) | 植食性昆虫の生活史スケジュールの進化：寄主植物の季節性と天敵による攻撃のジレンマ      | 900   |
| 301 | 特別研究員<br>奨励費 | 鄭 栄龍   | 特別研究員(DC1) | 包括的な他者の創造・表象の機制：その起源と変遷の歴史社会学的考察              | 900   |
| 302 | 特別研究員<br>奨励費 | 村上 達也  | 特別研究員(DC1) | 北部低地における古代マヤの政治過程の研究                          | 900   |
| 303 | 特別研究員<br>奨励費 | 福永 美和子 | 特別研究員(DC1) | 東西ドイツ創設期における「ナチズム問題」の比較分析                     | 500   |
| 304 | 特別研究員<br>奨励費 | 外山 弥呂  | 特別研究員(DC1) | 19世紀以来の仏哲学におけるベルクソンとバシュラールのもつ意義の思想史的考究        | 500   |
| 305 | 特別研究員<br>奨励費 | 清水 祐公子 | 特別研究員(DC1) | 波長可変なラゲールガウスビームを利用した中性原子のトラップ法の開発             | 900   |
| 306 | 特別研究員<br>奨励費 | 大庭 三枝  | 特別研究員(PD)  | アジア太平洋概念の成立過程におけるASEANの役割                     | 400   |
| 307 | 特別研究員<br>奨励費 | 鳥居 寛之  | 特別研究員(PD)  | 反陽子原子科学の開拓的研究                                 | 1,200 |
| 308 | 特別研究員<br>奨励費 | 檜垣 浩之  | 特別研究員(PD)  | 非中性プラズマ(電子、陽電子、イオン、反陽子)の閉じ込め及びプラズマ特性の研究       | 1,200 |
| 309 | 特別研究員<br>奨励費 | 牧野 淳一郎 | 助教授        | 高密度恒星系の中での恒星進化の研究                             | 1,500 |
| 310 | 特別研究員<br>奨励費 | 高野 穆一郎 | 教授         | レニウム—オスミウム放射壊変系をトレーサー及び年代測定法として用いたマントルプロセスの解明 | 1,200 |
| 311 | 特別研究員<br>奨励費 | 小牧 研一郎 | 教授         | エキゾティック原子分光                                   | 1,200 |
| 312 | 特別研究員<br>奨励費 | 友田 修司  | 教授         | $\pi$ 面ジアステレオ選択性におけるヘテロ原子効果の研究                | 1,200 |

## 平成10年度 奨学寄付金一覧

| 受入番号 | 寄付者                             | 金額         | 官職           | 名前     | 研究テーマ                                     |
|------|---------------------------------|------------|--------------|--------|-------------------------------------------|
| 1    | 日本化薬(株)                         | 13,400,000 | 教授           | 赤沼 宏史  | 1,5AGの代謝学的研究                              |
| 2    | 東京ファブリック工業(株)                   | 1,000,000  | 教授           | 川本 皓嗣  |                                           |
| 3    | 小牧研一郎((財)山田科学振興財団)              | 200,000    | 教授           | 小牧 研一郎 | 「物質中の高速イオン98」国際会議                         |
| 4    | (株)ベストライフ                       | 1,000,000  | 助教授          | 石井 直方  |                                           |
| 5    | 東京大学準硬式野球部OB会                   | 200,000    | 広域科学専攻主任     |        |                                           |
| 6    | 高田壮則((財)日本生命財団)                 | 500,000    | 助教授          | 大原 雅   | 森林の孤立化が林床植物の存続に与える影響の集団遺伝学的研究             |
| 7    | (財)旭硝子財団                        | 700,000    | 教授           | 川戸 佳   | 分子情報顕微鏡を用いた脳細胞の情報変換機構の解析                  |
| 8    | チッソ(株)研究開発本部                    | 500,000    | 教授           | 友田 修司  | 有機合成化学研究指導(計算化学、量子有機化学を活用)                |
| 9    | (財)三菱信託山室記念奨学財団                 | 2,800,000  | 教授           | 小林 啓二  |                                           |
| 10   | 格技場建設実行委員会                      | 40,000,000 | 教養学部長        |        | 格技場建設                                     |
| 11   | 栗田工業(株)                         | 500,000    | 教授           | 小林 啓二  |                                           |
| 12   | ((財)旭硝子財団                       | 1,500,000  | 教授           | 油井 大三郎 | 米国における多文化主義政策とマイノリティ集団のアイデンティティ変容に関する比較研究 |
| 13   | メディアフロント(有)                     | 126,940    | 教授           | 林 利彦   |                                           |
| 14   | 麒麟麦酒(株)                         | 1,000,000  | 教授           | 浅島 誠   |                                           |
| 15   | 池内昌彦(国際ヒューマンフロンティアサイエンスプログラム機構) | 5,468,000  | 助教授          | 池内 昌彦  | シアノバクテリアにおける光合成と呼吸の電子伝達鎖の研究               |
| 16   | (株)東芝研究開発センター                   | 400,000    | 教授           | 鹿兒島 誠一 | 低次元化合物の電子物性に関する研究                         |
| 17   | (財)石本記念デサントスポーツ科学振興財団           | 400,000    | 助手           | 篠原 稔   | 筋育因によるレジスタンストレーニング効果の分析と評価                |
| 18   | (株)パディコーポレーション                  | 200,000    | 助手           | 清野 聡子  | コンピュータ・グラフィックスによる魚類の運動の復元の研究              |
| 19   | 日本電信電話(株)                       | 600,000    | 助教授          | 中澤 恒子  | 辞書規則の方式確立と計算アルゴリズムの検討の研究                  |
| 20   | 三共(株)                           | 1,000,000  | 教授           | 黒田 玲子  | 「DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究」その18              |
| 21   | (社)日本アクチュアリー会                   | 320,000    | 教授           | 松原 望   |                                           |
| 22   | (社)日本アクチュアリー会                   | 320,000    | 教授           | 松原 望   |                                           |
| 23   | (財)とうきゅう環境浄化財団                  | 1,540,000  | 教授           | 高野 穆一郎 |                                           |
| 24   | (株)環境デザイン研究所                    | 100,000    | 助手           | 清野 聡子  | 水族館の研究                                    |
| 25   | (株)コスモ総合研究所                     | 500,000    | 助教授          | 瀬川 浩司  |                                           |
| 26   | ジャパン・イー・エム(株)                   | 1,000,000  | 助教授          | 蜂巢 泉   | 天体物理学の研究                                  |
| 27   | (財)アメリカ研究振興会                    | 4,000,000  | アメリカ研究資料センター |        | 1998年度センターの運営ならびに他の諸活動                    |
| 28   | 日本化薬(株)                         | 11,900,000 | 教授           | 赤沼 宏史  | 1,5AGの代謝学的研究                              |
| 29   | 大原 雅((財)とうきゅう環境浄化財団)            | 650,000    | 助教授          | 大原 雅   | 多摩川水源域に生育する草本植物集団の遺伝的組成におよぼす集団孤立化の定量的評価   |
| 30   | (株)ナプス                          | 700,000    | 助手           | 篠原 稔   |                                           |

| 受入番号 | 寄付者                   | 金額        | 官職        | 名前     | 研究テーマ                        |
|------|-----------------------|-----------|-----------|--------|------------------------------|
| 31   | 日本化薬(株)               | 1,500,000 | 生命認知科学科主任 |        |                              |
| 32   | 日産化学工業                | 500,000   | 教授        | 菅原 正   | 新しい有機機能性材料に関する研究             |
| 33   | 小倉尚志(三菱信託銀行(株))       | 1,000,000 | 助教授       | 小倉 尚志  |                              |
| 34   | 奥野 誠((財)日本生命財団)       | 2,000,000 | 助教授       | 奥野 誠   | 外因性内分泌攪乱物質による哺乳類精子の機能障害の評価   |
| 35   | (財)小野スポーツ体力研究財団       | 500,000   | 助手        | 川上 泰雄  |                              |
| 36   | (株)松本医科器械             | 400,000   | 教授        | 福林 徹   |                              |
| 37   | 松本忠夫((財)バイオインダストリー協会) | 1,890,000 | 教授        | 松本 忠夫  | シロアリなどの食料性昆虫の共生微生物の研究        |
| 38   | (財)大川情報通信基金           | 1,000,000 | 教授        | 山口 泰   |                              |
| 39   | 吉富製薬(株)東京研究所          | 300,000   | 教授        | 石浦 章一  |                              |
| 40   | (財)住友財団               | 800,000   | 助教授       | 加藤 光裕  |                              |
| 41   | 油井大三郎((財)三菱財団)        | 680,000   | 教授        | 油井 大三郎 | アメリカニゼーションと文化摩擦に関する国際比較研究    |
| 42   | (財)住友財団               | 2,200,000 | 助教授       | 山口 泰   |                              |
| 43   | スミス・アンド・ネフュー(株)       | 1,000,000 | 教授        | 福林 徹   |                              |
| 44   | (財)カシオ科学振興財団          | 1,000,000 | 助教授       | 山口 泰   |                              |
| 45   | 大原 雅((財)住友財団)         | 700,000   | 助教授       | 大原 雅   |                              |
| 46   | (株)ニッピ                | 1,000,000 | 教授        | 林 利彦   |                              |
| 47   | (財)総合研究奨励会            | 900,000   | 教授        | 山影 進   | AGS研究                        |
| 48   | (財)総合研究奨励会            | 450,000   | 教授        | 高塚 和夫  | AGS研究                        |
| 49   | 味の素(株)                | 1,500,000 | 教授        | 小林 寛道  |                              |
| 50   | 三菱プレジョン(株)            | 250,000   | 教授        | 福林 徹   |                              |
| 51   | 三共(株)                 | 1,000,000 | 教授        | 黒田 玲子  | 「DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究」その19 |
| 52   | 沖縄県海洋深層開発共同組合         | 1,500,000 | 教授        | 高橋 正征  |                              |

## 平成10年度 受託研究

| 受入番号 | 委託団体                | 受託担当者  | 金額         | タイトル                                                                      |
|------|---------------------|--------|------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 1    | 日本学術振興会             | 牧野 淳一郎 | 118,939,00 | 多粒子系向け超並列計算機の開発                                                           |
| 2    | 医薬品副作用被害救済・研究進行調査機構 | 林 利彦   | 7,000,000  | 臓器最小機能単位の構築                                                               |
| 3    | 科学技術振興事業団           | 阿波賀邦夫  | 3,000,000  | 有機・無機ナノコンポジットの動的な磁氣的性質                                                    |
| 4    | (財)日本宇宙フォーラム        | 跡見 順子  | 20,000,000 | 両生類の培養細胞の接着性と細胞分化・形態形成                                                    |
| 5    | (財)日本宇宙フォーラム        | 奥野 誠   | 2,200,000  | 哺乳類の雄性生殖器及び精子形成に及ぼす重力の作用に関する研究                                            |
| 6    | (財)日本宇宙フォーラム        | 松田 良一  | 3,700,000  | 過重力環境は骨格筋の形成と筋ジストロフィーの発症に影響を及ぼすか？                                         |
| 7    | (財)日本宇宙フォーラム        | 福永 哲夫  | 4,800,000  | 宇宙環境が人体の筋萎縮を引き起こすメカニズムの解明と、宇宙における至適体力トレーニング処方(スペーストレーニング処方)作製の為の総合的研究     |
| 8    | 科学技術振興事業団           | 氷上 忍   | 2,000,000  | エネルギー単位相関と量子カオス                                                           |
| 9    | 科学技術振興事業団           | 小宮山 進  | 7,000,000  | 量子構造を用いた遠赤外光技術の開拓と量子物性研究                                                  |
| 10   | 科学技術振興事業団           | 菅原 正   | 5,000,000  | 超構造分子の創製と有機量子デバイスへの応用                                                     |
| 11   | 科学技術振興事業団           | 清水 明   | 3,700,000  | 量子場操作                                                                     |
| 12   | 科学技術振興事業団           | 浅島 誠   | 9,900,000  | 器官形成の分子機構                                                                 |
| 13   | 科学技術振興事業団           | 前田 京剛  | 2,500,000  | Vortex状態のダイナミクスの理解                                                        |
| 14   | 科学技術振興事業団           | 染田 清彦  | 1,580,000  | フェムト秒領域の光反応コントロール                                                         |
| 15   | 科学技術振興事業団           | 酒井 邦嘉  | 7,000,000  | 脳における言語獲得装置の解析                                                            |
| 16   | (有)アートヘヴンナイン        | 福永 哲夫  | 520,000    | 大腿部筋肉量からのHQOLの推定に関する研究                                                    |
| 17   | 高度情報科学技術研究機構        | 小河 正基  | 1,365,000  | マントル対流の並列シミュレーションに関する研究                                                   |
| 18   | 科学技術振興事業団           | 小倉 尚志  | 2,000,000  | チトクロム酸化酵素の水素イオン能動輸送機構の時間分解赤外光学的研究                                         |
| 19   | 科学技術振興事業団           | 後藤 則行  | 1,192,000  | 地球温暖化問題における国際協調の政治経済学的分析                                                  |
| 20   | 科学技術振興事業団           | 関本 弘之  | 500,000    | 植物における異性の認識と有性生殖成立の機構                                                     |
| 21   | 科学技術振興事業団           | 川口 正代司 | 800,000    | ミヤコグサで開く根粒共生系の分子遺伝学                                                       |
| 22   | 国立精神・神経センター         | 松田 良一  | 1,000,000  | mdxマウスの咀嚼く筋はなぜ変性しないのか                                                     |
| 23   | 国立精神・神経センター         | 石浦 章一  | 2,200,000  | トリプレット病の治療に関する研究                                                          |
| 24   | バイオテクノロジー開発技術研究組合   | 陶山 明   | 5,250,000  | 長鎖DNAプローブ設計アルゴリズムの開発                                                      |
| 25   | 国立環境研究所             | 嶋田 正和  | 2,098,000  | 平成10年度野生生物集団の絶滅プロセスに関する研究<br>(サブテーマ)数理モデルによる絶滅プロセスの総合的解析                  |
| 26   | 国立環境研究所             | 後藤 則行  | 1,400,000  | 平成10年度持続可能な国際社会に向けた環境経済統合分析手法の開発に関する研究<br>(サブテーマ)国際経済モデルの開発とアジアへの適用に関する研究 |

# 付属資料2

## 平成10年度授業日程表

|                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 4月9日(木)～7月22日(水)       | 第1・3学期授業                |
| 7月23日(木)～7月30日(木)      | 第1・3学期試験前半(総合科目、方法論基礎等) |
| 7月31日(金)～8月31日(月)      | 夏季休業                    |
| 9月1日(火)～9月8日(火)        | 第1・3学期試験後半              |
| 9月9日(水)～10月11日(日)      | 秋季休業                    |
| 10月12日(月)～12月24日(水)    | 第2・4学期授業前半              |
| 12月25日(金)～平成11年1月7日(木) | 冬季休業                    |
| 1月8日(金)～2月5日(金)        | 第2・4学期授業後半              |
| 2月8日(月)～2月24日(水)       | 第2・4学期試験                |

## 教養学部の授業時間

|     |               |
|-----|---------------|
| 1時限 | 9時00分～10時30分  |
| 2時限 | 10時40分～12時10分 |
| 3時限 | 13時00分～14時30分 |
| 4時限 | 14時40分～16時10分 |
| 5時限 | 16時20分～17時50分 |

平成10年度志願, 合格, 入学状況

教養学部前期課程

| 科 類  | 試験日程 | 志願者   | 受験者   | 合格者   | 入学者   | 定員外   |       | 入学者総数 |
|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|      |      |       |       |       |       | 特選第1種 | 国費    |       |
| 文科一類 | 前期   | 1,813 | 1,660 | 561   | 561   | 1     | 2     | 625   |
|      | 後期   | 1,296 | 301   | 62    | 61    |       |       |       |
| 二類   | 前期   | 1,040 | 1,018 | 342   | 341   | 2     | 4(1)  | 386   |
|      | 後期   | 455   | 184   | 39    | 39    |       |       |       |
| 三類   | 前期   | 1,530 | 1,344 | 454   | 453   | 1     | 0     | 510   |
|      | 後期   | 1,139 | 247   | 56    | 56    |       |       |       |
| 理科一類 | 前期   | 3,095 | 2,853 | 1,154 | 1,151 | 3     | 24(6) | 1,313 |
|      | 後期   | 2,127 | 621   | 140   | 135   |       |       |       |
| 二類   | 前期   | 2,000 | 1,735 | 507   | 500   | 0     | 0     | 561   |
|      | 後期   | 611   | 256   | 64    | 61    |       |       |       |
| 三類   | 前期   | 403   | 323   | 81    | 81    | 0     | 0     | 91    |
|      | 後期   | 172   | 46    | 10    | 10    |       |       |       |
| 計    | 前期   | 9,881 | 8,933 | 3,099 | 3,087 | 7     | 30(7) | 3,486 |
|      | 後期   | 5,800 | 1,655 | 371   | 362   |       |       |       |

定員外・国費に外国政府派遣を含む〔( )内の数〕

教養学部後期課程

| 学 科*     | 平成10年度進学者 | 学士入学者 | 学 科     | 平成11年3月卒業予定者 |
|----------|-----------|-------|---------|--------------|
| 超域文化科学科  | 27        |       | 教養学科第一  | 43           |
| 地域文化研究学科 | 41        | 1     | 第二      | 51           |
| 総合社会科学科  | 39        |       | 第三      | 47           |
| 基礎科学科    | 39        |       | 基礎科学科第一 | 43           |
| 広域科学科    | 25        |       | 第二      | 20           |
| 生命・認知科学科 | 24        |       |         |              |
| 計        | 195       | 1     | 計       | 204          |

\* 後期課程は平成8年度より5学科より6学科(超域文化科学科, 地域文化研究学科, 総合社会科学科, 基礎科学科, 広域科学科, および生命・認知科学科)体制に改組されたが, 平成10年3月31日以前に進学した学生は従来の5学科の規則にて履修する

大学院総合文化研究科

| 専 攻         | 修士課程  |      |      | 博士課程 |      |      |
|-------------|-------|------|------|------|------|------|
|             | 志願者   | 合格者  | 入学者  | 志願者  | 合格者  | 入学者  |
| 言語情報科学      | 133   | 38   | 38   | 71   | 28   | 26   |
| 超域文化科学      | 192   | 42   | 41   | 67   | 34   | 34   |
| 地域文化研究      | 127   | 40   | 38   | 57   | 30   | 29   |
| 国際社会科学      | 209   | 24   | 23   | 56   | 19   | 19   |
| 広域科学        | 310   | 123  | 104  | 82   | 68   | 67   |
| （生命環境科学系）   | (145) | (46) | (43) | (29) | (26) | (26) |
| （広域システム科学系） | (53)  | (33) | (26) | (27) | (21) | (21) |
| （相関基礎科学系）   | (112) | (44) | (35) | (26) | (21) | (20) |
| 計           | 971   | 267  | 244  | 333  | 179  | 175  |

平成11年度進学内定者数

平成10年10月30日

上段：第一段階 下段：第二段階

| 学 部 学 科   | 定数         | 内 定 者 数  |           |            |            |           |          | 再 志 望      |       |    | 合 計 |       |       |
|-----------|------------|----------|-----------|------------|------------|-----------|----------|------------|-------|----|-----|-------|-------|
|           |            | 文一       | 文二        | 文三         | 理一         | 理二        | 理三       | 小 計        | 文三    | 理一 |     | 理二    |       |
| 法         |            | 654<br>7 | 4         | 2          | 2          | 3         |          | 665<br>7   | 672   |    |     | 672   |       |
| 経済        |            |          | 327<br>30 | 12         | 5          | 1         |          | 345<br>30  | 375   |    |     | 375   |       |
| 文         | 416        | 1<br>1   | 9<br>6    | 249<br>106 | 8<br>7     | 6<br>5    |          | 273<br>125 | 398   | 5  |     | 403   |       |
| 教育        | 88         |          | 2         | 53<br>27   | 2<br>3     | 4<br>2    |          | 61<br>32   | 93    |    |     | 93    |       |
| 理         | 322        |          |           | 1          | 165<br>75  | 60<br>41  |          | 226<br>116 | 342   |    |     | 342   |       |
| 工         | 1,040      |          | 3         | 1          | 606<br>332 | 48        |          | 658<br>332 | 990   | 42 |     | 1,032 |       |
| 農         | 300        |          | 2<br>1    | 7<br>3     | 28<br>13   | 169<br>83 |          | 206<br>100 | 306   | 2  | 5   | 313   |       |
| 薬         | 80         |          |           |            | 11<br>12   | 45<br>18  |          | 56<br>30   | 86    |    |     | 86    |       |
| 医         | 医 学        | 100      |           |            | 1          | 10        | 94       | 105        | 105   |    |     | 105   |       |
|           | 健康科学<br>看護 | 43       | 1         |            | 4          | 2<br>1    | 15<br>13 | 22<br>14   | 36    | 3  | 8   | 47    |       |
|           | A 群        | 108      | 13<br>5   | 16<br>4    | 38<br>15   | 5<br>2    | 5<br>2   | 77<br>28   | 105   |    |     | 105   |       |
|           | B 群        | 79       | 1         | 2<br>1     | 4<br>3     | 27<br>12  | 20<br>9  | 54<br>25   | 79    |    |     | 79    |       |
| 教<br>養    | C 群        | 16       |           | 1          |            | 7<br>2    | 4<br>3   | 12<br>5    | 17    |    |     | 17    |       |
| 計         |            | 670      | 366       | 371        | 869        | 390       | 94       | 2,760      | 3,604 | 5  | 47  | 13    | 3,669 |
|           |            | 13       | 42        | 154        | 459        | 176       |          | 844        |       |    |     |       |       |
| 科類別最終内定者数 |            | 683      | 408       | 530        | 1,375      | 579       | 94       |            |       |    |     |       |       |

備 考 … 本表には下記の外国人留学生が含まれており、いずれも第一段階で内定している。

○法 学 部 … 外国学校卒業生特別選考第1種1名,日本政府（文部省）奨学金留学生2名

○工 学 部 … 外国学校卒業生特別選考第1種4名,日本政府（文部省）奨学金留学生11名，外国政府派遣留学生3名

○文 学 部 … 日本政府（文部省）奨学金留学生1名

○理 学 部 … 日本政府（文部省）奨学金留学生1名

○経 済 学 部 … 外国学校卒業生特別選考第1種2名,日本政府（文部省）奨学金留学生4名

○教 養 学 部 … 日本政府（文部省）奨学金留学生1名

定員の推移

(平成5年度～平成10年度、教養学部前期課程募集人員・後期課程進学者受入定数、大学院総合文化研究科受入予定人員)

| 科 類  | 平成5年<br>1993年 |       | 平成6年<br>1994年 |       | 平成7年<br>1995年 |       | 平成8年<br>1996年 |       | 平成9年<br>1997年 |       | 平成10年<br>1998年 |       |
|------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------|-------|----------------|-------|
| 文科一類 | 710           |       | 710           |       | 675           |       | 655           |       | 645           |       | 615            |       |
| 文科二類 | 430           |       | 430           |       | 405           |       | 395           |       | 385           |       | 375            |       |
| 文科三類 | 500           |       | 500           |       | 500           |       | 500           |       | 500           |       | 500            |       |
| 理科一類 |               | 1,295 |               | 1,295 |               | 1,295 |               | 1,295 |               | 1,295 |                | 1,276 |
| 理科二類 |               | 561   |               | 561   |               | 561   |               | 561   |               | 561   |                | 560   |
| 理科三類 |               | 90    |               | 90    |               | 90    |               | 90    |               | 90    |                | 90    |
| 計    | 1,640         | 1,946 | 1,640         | 1,946 | 1,580         | 1,946 | 1,550         | 1,946 | 1,530         | 1,946 | 1,490          | 1,926 |
|      | 3,586         |       | 3,586         |       | 3,526         |       | 3,496         |       | 3,476         |       | 3,416          |       |

| 学 科     | 平成5年<br>1993年 |    | 平成6年<br>1994年 |    | 平成7年<br>1995年 |    |
|---------|---------------|----|---------------|----|---------------|----|
| 教養学科第一  | 30            |    | 30            |    | 30            |    |
| 教養学科第二  | 45            |    | 45            |    | 45            |    |
| 教養学科第三  | 10            |    | 10            |    | 10            |    |
| 基礎科学科第一 |               | 60 |               | 60 |               | 60 |
| 基礎科学科第二 |               | 15 |               | 15 |               | 15 |
| 計       | 85            | 75 | 85            | 75 | 85            | 75 |
|         | 160           |    | 160           |    | 160           |    |

【平成8年(1996年)4月、後期課程改組】

| 学 科      | 平成8年<br>1996年 | 平成9年<br>1997年 | 平成10年<br>1998年 |
|----------|---------------|---------------|----------------|
| 超域文化科学科  | 20            | 20            | 20             |
| 地域文化研究学科 | 35            | 35            | 35             |
| 総合社会科学科  | 15            | 15            | 15             |
| 基礎科学科    | 50            | 45            | 45             |
| 広域科学科    | 20            | 25            | 25             |
| 生命・認知科学科 | 20            | 20            | 20             |
| 計        | 160           | 160           | 160            |

| 専 攻                 | 修士  | 博士 | 修士  | 博士 | 修士          | 博士         | 修士          | 博士         | 修士          | 博士         | 修士          | 博士         |
|---------------------|-----|----|-----|----|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 比較文学比較文化            | 3   | 3  | 3   | 3  | 3           | 3          |             |            |             |            |             |            |
| 表象文化論               | 6   | 3  | 6   | 3  | 6           | 3          |             |            |             |            |             |            |
| 言語情報科学              | 30  |    | 30  |    | 30          | 24         | 30          | 24         | 30          | 24         | 30          | 24         |
| 超域文化科学*             |     |    |     |    |             |            | 41          | 29         | 41          | 29         | 41          | 29         |
| 地域文化研究              | 12  | 6  | 12  | 6  | 12          | 6          | 43          | 27         | 43          | 27         | 43          | 27         |
| 国際社会科学*             |     |    |     |    |             |            | 34          | 23         | 34          | 23         | 34          | 23         |
| 国際関係論               | 7   | 4  | 7   | 4  | 7           | 4          |             |            |             |            |             |            |
| 相関社会科学              | 7   | 3  | 7   | 3  | 7           | 3          |             |            |             |            |             |            |
| 文化人類学               | 6   | 4  | 6   | 4  | 6           | 4          |             |            |             |            |             |            |
| 広域科学**<br>(生命環境科学系) | 11  | 5  | 58  | 32 | 100<br>(38) | 61<br>(23) | 100<br>(38) | 61<br>(23) | 100<br>(38) | 61<br>(23) | 100<br>(38) | 61<br>(23) |
| (広域システム科学系)         |     |    |     |    | (25)        | (15)       | (25)        | (15)       | (25)        | (15)       | (25)        | (15)       |
| (相関基礎科学系)           |     |    |     |    | (37)        | (23)       | (37)        | (23)       | (37)        | (23)       | (37)        | (23)       |
| 計                   | 82  | 28 | 129 | 55 | 171         | 108        | 248         | 164        | 248         | 164        | 248         | 164        |
|                     | 110 |    | 184 |    | 279         |            | 412         |            | 412         |            | 412         |            |

\*平成8年度より、比較文学比較文化、表象文化論、文化人類学の3専攻は超域文化科学専攻へ改組。

また、国際関係論、相関社会科学の2専攻は国際社会科学専攻へ改組。

\*\*広域科学専攻は平成6年度より3系からなる専攻に拡充改組された。各系の定員数は目安である。

平成10年度クラス編成表（1年）

(平成10年5月1日現在)

|      | 文科一類 |    | 文科二類 |    | 計  |
|------|------|----|------|----|----|
|      | 入学   | 留年 | 入学   | 留年 |    |
| 2 C  | 1    |    | 2    |    | 3  |
| 3 E  | 2    |    |      |    | 2  |
| 4 F  | 30   |    | 20   |    | 50 |
| 5 F  | 30   |    | 20   | 1  | 51 |
| 6 F  | 30   |    | 20   |    | 50 |
| 7 F  | 29   |    | 21   |    | 50 |
| 8 F  | 28   |    | 21   |    | 49 |
| 9 F  | 28   |    | 21   |    | 49 |
| 10G  | 5    |    | 6    |    | 11 |
| 11H  | 24   |    | 25   |    | 49 |
| 12H  | 25   |    | 24   |    | 49 |
| 13 I | 11   |    | 9    |    | 20 |
| 14B  | 31   |    | 15   |    | 46 |
| 15B  | 31   |    | 15   |    | 46 |
| 16B  | 31   |    | 15   |    | 46 |
| 17B  | 31   |    | 14   |    | 45 |
| 18B  | 31   |    | 14   |    | 45 |
| 19D  | 38   | 1  | 21   |    | 60 |
| 20D  | 38   |    | 21   |    | 59 |
| 21D  | 38   |    | 21   |    | 59 |
| 22D  | 38   |    | 20   |    | 58 |
| 23D  | 38   |    | 20   |    | 58 |
| 24D  | 37   |    | 21   |    | 58 |

(合計1,013)

|     | 文科三類 |    | 計  |
|-----|------|----|----|
|     | 入学   | 留年 |    |
| 1 A | 1    |    | 1  |
| 2 C | 3    |    | 3  |
| 4 F | 44   |    | 44 |
| 5 F | 43   |    | 43 |
| 6 F | 43   |    | 43 |
| 7 G | 15   |    | 15 |
| 8 H | 54   |    | 54 |
| 9 I | 4    |    | 4  |
| 10B | 46   |    | 46 |
| 11B | 43   | 3  | 46 |
| 12B | 22   |    | 22 |
| 13D | 55   |    | 55 |
| 14D | 54   |    | 54 |
| 15D | 55   |    | 55 |
| 16D | 28   |    | 28 |

(合計513)

|     | 理科一類 |    | 計  |
|-----|------|----|----|
|     | 入学   | 留年 |    |
| 1 A | 2    |    | 2  |
| 2 C | 4    |    | 4  |
| 3 E | 1    |    | 1  |
| 4 F | 45   | 1  | 46 |
| 5 F | 45   |    | 45 |
| 6 F | 45   |    | 45 |
| 7 F | 45   |    | 45 |
| 8 F | 44   | 1  | 45 |
| 9 F | 44   |    | 44 |
| 10G | 23   |    | 23 |
| 11H | 58   | 1  | 59 |
| 12H | 57   | 1  | 58 |
| 13B | 49   | 2  | 51 |
| 14B | 49   | 1  | 50 |
| 15B | 49   | 1  | 50 |
| 16B | 49   |    | 49 |
| 17B | 48   |    | 48 |
| 18B | 49   | 1  | 50 |
| 19B | 49   |    | 49 |
| 20B | 49   | 2  | 51 |
| 21B | 48   |    | 48 |
| 22B | 49   | 1  | 50 |
| 23B | 49   |    | 49 |
| 24B | 49   | 1  | 50 |
| 25D | 53   | 1  | 54 |
| 26D | 53   |    | 53 |
| 27D | 52   | 1  | 53 |
| 28D | 52   | 2  | 54 |
| 29D | 52   | 1  | 53 |
| 30D | 52   | 2  | 54 |

(合計1,333)

|     | 理科二類 |    | 理科三類 |    | 計  |
|-----|------|----|------|----|----|
|     | 入学   | 留年 | 入学   | 留年 |    |
| 2 C | 2    |    | 2    |    | 4  |
| 4 F | 35   |    | 4    |    | 39 |
| 5 F | 35   |    | 4    |    | 39 |
| 6 G | 9    |    | 1    |    | 10 |
| 7 H | 62   |    | 3    |    | 65 |
| 8 B | 41   | 1  | 9    |    | 51 |
| 9 B | 39   | 1  | 9    |    | 49 |
| 10B | 41   | 1  | 9    |    | 51 |
| 11B | 40   |    | 9    |    | 49 |
| 12B | 39   | 3  | 8    |    | 50 |
| 13B | 40   |    | 9    |    | 49 |
| 14B | 40   | 2  | 9    |    | 51 |
| 15D | 56   |    | 6    |    | 62 |
| 16D | 55   |    | 6    |    | 61 |
| 17D | 27   |    | 3    |    | 30 |

(合計660)

- A：ドイツ語既修クラス  
B：ドイツ語未修クラス  
C：フランス語既修クラス  
D：フランス語未修クラス  
E：中国語既修クラス
- F：中国語未修クラス  
G：ロシア語未修クラス  
H：スペイン語未修クラス  
I：朝鮮語未修クラス

総計3,519名

平成10年度クラス編成表（2年）

(平成10年5月1日現在)

|      | 文科一類 |    | 文科二類 |    | 計  |
|------|------|----|------|----|----|
|      | 進級   | 留年 | 進級   | 留年 |    |
| 1 A  | 1    |    |      |    | 1  |
| 2 C  | 4    | 1  | 1    | 1  | 7  |
| 3 E  | 2    |    |      |    | 2  |
| 4 F  | 32   | 2  | 22   | 3  | 59 |
| 5 F  | 31   | 4  | 21   | 1  | 57 |
| 6 F  | 31   | 1  | 22   |    | 54 |
| 7 F  | 31   | 2  | 22   | 4  | 59 |
| 8 F  | 32   | 1  | 21   | 2  | 56 |
| 9 F  | 32   | 4  | 21   | 2  | 59 |
| 10G  | 4    | 1  | 7    |    | 12 |
| 11H  | 35   | 2  | 29   | 2  | 68 |
| 12H  | 35   | 4  | 29   |    | 68 |
| 13 I | 13   |    | 8    |    | 21 |
| 14B  | 31   | 4  | 11   | 4  | 50 |
| 15B  | 30   | 4  | 12   |    | 46 |
| 16B  | 30   | 3  | 12   | 2  | 47 |
| 17B  | 29   |    | 13   | 1  | 43 |
| 18B  | 29   | 6  | 13   | 3  | 51 |
| 19B  | 30   | 3  | 11   | 1  | 45 |
| 20D  | 28   | 6  | 17   | 4  | 55 |
| 21D  | 28   | 3  | 17   | 1  | 49 |
| 22D  | 28   | 3  | 17   | 1  | 49 |
| 23D  | 27   | 2  | 18   |    | 47 |
| 24D  | 27   | 2  | 17   | 2  | 48 |
| 25D  | 27   | 1  | 17   | 2  | 47 |
| 26D  | 27   | 2  | 17   | 1  | 47 |

(合計1,147)

|     | 文科三類 |    | 計  |
|-----|------|----|----|
|     | 進級   | 留年 |    |
| 1 A | 2    | 1  | 3  |
| 2 C | 2    |    | 2  |
| 4 F | 51   | 7  | 58 |
| 5 F | 50   | 7  | 57 |
| 6 F | 50   | 13 | 63 |
| 7 G | 12   | 3  | 15 |
| 8 H | 53   | 7  | 60 |
| 9 I | 11   | 2  | 13 |
| 10B | 36   | 5  | 41 |
| 11B | 34   | 3  | 37 |
| 12B | 36   | 2  | 38 |
| 13D | 43   | 6  | 49 |
| 14D | 43   | 7  | 50 |
| 15D | 42   | 6  | 48 |
| 16D | 41   | 3  | 44 |

(合計578)

- A：ドイツ語既修クラス  
B：ドイツ語未修クラス  
C：フランス語既修クラス  
D：フランス語未修クラス  
E：中国語既修クラス
- F：中国語未修クラス  
G：ロシア語未修クラス  
H：スペイン語未修クラス  
I：朝鮮語未修クラス

|     | 理科一類 |    | 計  |
|-----|------|----|----|
|     | 進級   | 留年 |    |
| 1 A | 2    | 1  | 3  |
| 2 C | 3    |    | 3  |
| 3 E | 2    |    | 2  |
| 4 F | 59   | 10 | 69 |
| 5 F | 60   | 11 | 71 |
| 6 F | 60   | 6  | 66 |
| 7 F | 58   | 7  | 65 |
| 8 F | 58   | 14 | 72 |
| 9 G | 6    | 8  | 14 |
| 10H | 58   | 5  | 63 |
| 11H | 56   | 3  | 59 |
| 12B | 47   | 9  | 56 |
| 13B | 45   | 9  | 54 |
| 14B | 45   | 7  | 52 |
| 15B | 46   | 11 | 57 |
| 16B | 45   | 14 | 59 |
| 17B | 45   | 10 | 55 |
| 18B | 45   | 9  | 54 |
| 19B | 46   | 9  | 55 |
| 20B | 45   | 9  | 54 |
| 21B | 46   | 5  | 51 |
| 22B | 46   | 7  | 53 |
| 23B | 46   | 6  | 52 |
| 24B | 45   | 14 | 59 |
| 25D | 50   | 16 | 66 |
| 26D | 51   | 15 | 66 |
| 27D | 50   | 13 | 63 |
| 28D | 50   | 9  | 59 |
| 29D | 49   | 9  | 58 |
| 30D | 49   | 10 | 59 |

(合計1,569)

|       | 理科二類 |    | 理科三類 |    | 計  |
|-------|------|----|------|----|----|
|       | 進級   | 留年 | 進級   | 留年 |    |
| 1 A   | 2    |    |      |    | 2  |
| 2 C   | 2    |    | 1    |    | 3  |
| 4 F   | 44   | 8  | 3    |    | 55 |
| 5 F   | 44   | 11 | 2    | 1  | 58 |
| 6 G   | 7    | 3  | 1    |    | 11 |
| 7 H   | 71   | 4  | 6    |    | 81 |
| 8 B   | 42   | 6  | 9    |    | 57 |
| 9 B   | 40   | 6  | 10   |    | 56 |
| 1 0 B | 40   | 5  | 10   |    | 55 |
| 1 1 B | 40   | 6  | 10   |    | 56 |
| 1 2 B | 37   | 10 | 10   |    | 57 |
| 1 3 B | 39   | 11 | 9    |    | 59 |
| 1 4 B | 40   | 9  | 9    | 1  | 59 |
| 1 5 D | 37   | 6  | 4    |    | 47 |
| 1 6 D | 36   | 6  | 5    | 1  | 48 |
| 1 7 D | 36   | 12 | 4    |    | 52 |

(合計756)

総計4,050名

研究生

総合文化研究科大学院研究生，外国人研究生数

(平成10年11月1日現在)

| 専攻     | 大学院研究生 | 外国人研究生 | 計   |
|--------|--------|--------|-----|
| 言語情報科学 | 1      | 13     | 14  |
| 超域文化科学 | 7      | 35     | 42  |
| 地域文化研究 | 2      | 12     | 14  |
| 国際社会科学 | 5      | 16     | 21  |
| 広域科学   | 11     | 7      | 18  |
| 計      | 26     | 83     | 109 |

教養学部研究生数

(平成10年10月1日現在)

|      |    |            |
|------|----|------------|
| 後期課程 | 17 | (このうち外国人6) |
|------|----|------------|

前期課程には，学部研究生制度がない。  
研究生の出願資格は，4年制大学卒業又は同程度の学力をもつ者。

平成10年度の役職者

研究科長・学部長および専攻・系主任・学科長

|          |              |             |       |
|----------|--------------|-------------|-------|
| 研究科長・学部長 | 大森 彌         | 言語情報科学専攻主任  | 臼井隆一郎 |
|          | 平成11年2月15日まで | 超域文化科学専攻主任  | 船曳 建夫 |
|          | 浅野 攝郎        | 地域文化研究専攻主任  | 古田 元夫 |
|          | 平成11年2月16日から | 国際社会科学専攻主任  | 廣松 毅  |
| 評議員      | 浅野 攝郎        | 広域科学専攻主任    | 鈴木賢次郎 |
|          | 平成11年2月15日まで | 生命環境科学系主任   | 小林 寛道 |
|          | 浅島 誠         | 相関基礎科学系主任   | 小島 憲道 |
|          | 平成11年2月16日から | 広域システム科学系主任 | 江里口良治 |
|          | 山内 昌之        | 超域文化科学科長    | 三角 洋一 |
| 総長補佐     | 桑野 隆         | 地域文化研究学科長   | 草光 俊雄 |
| 研究科長特別補佐 | 永野 三郎        | 総合社会科学科長    | 山本 吉宣 |
| 研究科長補佐   | 阿波賀邦夫        | 基礎科学科長      | 遠藤 泰樹 |
|          | 大石紀一郎        | 広域科学科長      | 江里口良治 |
|          | (建設)加藤 道夫    | 生命・認知科学科長   | 川口 昭彦 |

総合文化研究科・教養学部内の各種委員長・議長・代表など

|               |              |               |              |
|---------------|--------------|---------------|--------------|
| 総務委員会         | 大森 彌         | 三鷹国際学生宿舍運営委員会 | 柴 宜弘         |
|               | 平成11年2月15日まで |               | 平成10年9月30日まで |
|               | 浅野 攝郎        |               | 金子 邦彦        |
|               | 平成11年2月16日から |               | 平成10年10月1日から |
| 研究科委員会        | 大森 彌         | 後期運営委員会       | 三角 洋一        |
|               | 平成11年2月15日まで | 将来構想委員会       | 大森 彌         |
|               | 浅野 攝郎        |               | 平成11年2月15日まで |
|               | 平成11年2月16日から |               | 浅野 攝郎        |
| 研究科委員会(議長)    | 廣松 毅         |               | 平成11年2月16日から |
| 前期運営委員会       | 大森 彌         | 環境委員会         | 高橋 正征        |
|               | 平成11年2月15日まで | 発明委員会         | 大森 彌         |
|               | 浅野 攝郎        |               | 平成11年2月15日まで |
|               | 平成11年2月16日から |               | 浅野 攝郎        |
| 人事小委員会        | 大森 彌         |               | 平成11年2月16日から |
|               | 平成11年2月15日まで | 学生論文集編集委員会    | 大越 義久        |
|               | 浅野 攝郎        | 建設委員会         | 浅野 攝郎        |
|               | 平成11年2月16日から |               | 平成11年2月15日まで |
| 制度小委員会1       | 船曳 健夫        |               | 浅島 誠         |
| 制度小委員会2       | 古田 元夫        |               | 平成11年2月16日から |
| 制度小委員会3       | 小林 寛道        | 研究棟管理運営委員会    | 丹治 愛         |
| 制度小委員会4       | 小島 憲道        | 留学生委員会        | 青木 誠之        |
| 教務委員会         | 大澤 吉博        | 計算機委員会        | 玉井 哲雄        |
| 予算委員会         | 恒川 恵市        |               | 平成10年9月30日まで |
| 広報委員会         | 阿部 寛治        |               | 川合 慧         |
| 入試委員会         | 宮本 久雄        |               | 平成10年10月1日から |
| 教育・研究評価委員会    | 山本 泰         | 防災委員会         | 大森 彌         |
| 図書委員会         | 小川 浩         |               | 平成11年2月15日まで |
| 学生委員会         | 岩澤 雄司        |               | 浅野 攝郎        |
|               | 平成10年9月30日まで |               | 平成11年2月16日から |
|               | 中村 保夫        | 国際交流委員会       | 能登路雅子        |
|               | 平成10年10月1日から | 奨学委員会         | 久保内端郎        |
| 三鷹国際学生宿舍特別委員会 | 小林 寛道        | 放射線安全委員会      | 渡辺雄一郎        |

放射線施設運営委員会 \_\_\_\_\_ 渡辺雄一郎  
核燃料物質調査委員会 \_\_\_\_\_ 鈴木賢次郎  
進学情報センター運営委員会 \_\_\_\_\_ 山崎 泰規  
平成10年9月30日まで  
小宮山 進  
平成10年10月1日から  
組み替えDNA実験安全委員会 \_\_\_\_\_ 須藤 和夫  
実験動物委員会 \_\_\_\_\_ 松田 良一  
石綿問題委員会 \_\_\_\_\_ 中村 保夫  
アメリカ研究資料センター運営委員会 \_\_\_\_\_ 油井大三郎  
学友会評議員 \_\_\_\_\_ 岡 秀夫  
毒物・危険物管理安全委員会 \_\_\_\_\_ 浅島 誠  
学生相談所運営委員会 \_\_\_\_\_ 河内 十郎  
文化施設運営委員会 \_\_\_\_\_ 鈴木 英夫  
短期交換留学運営委員会 \_\_\_\_\_ 木畑 洋一  
平成10年9月30日まで

AIKOM運営委員会 \_\_\_\_\_ 山本 巍  
平成10年10月1日から  
ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会  
大築 立志  
教務関係事務電算処理委員会 \_\_\_\_\_ 丹波 清  
TA委員会 \_\_\_\_\_ 浅野 攝郎  
平成11年2月15日まで  
浅島 誠  
平成11年2月16日から  
スペース・コラボレーション・システムSCS運営委員会  
鈴木 英夫  
健康安全管理委員会 \_\_\_\_\_ 大森 彌  
平成11年2月15日まで  
浅野 攝郎  
平成11年2月16日から

部会主任およびその他の前期教育担当グループ責任者

英語 \_\_\_\_\_ 瀧田 佳子  
ドイツ語 \_\_\_\_\_ 青木 誠之  
中国語・朝鮮語 \_\_\_\_\_ 若林 正文  
フランス語 \_\_\_\_\_ 工藤 庸子  
ロシア語 \_\_\_\_\_ 浦 雅春  
スペイン語 \_\_\_\_\_ 上田 博人  
古典語 \_\_\_\_\_ 水谷 智洋  
外国語委員会委員長 \_\_\_\_\_ 瀧田 佳子  
法・政治 \_\_\_\_\_ 高橋 直樹  
経済 \_\_\_\_\_ 岩田 一政  
社会・社会思想史 \_\_\_\_\_ 山本 泰  
統計 \_\_\_\_\_ 縄田 和満  
国際関係 \_\_\_\_\_ 石井 明  
歴史学 \_\_\_\_\_ 並木 頼壽

国文・漢文学 \_\_\_\_\_ 藤井 貞和  
人類学 \_\_\_\_\_ 中村 雄祐  
哲学・科学史 \_\_\_\_\_ 今井 知正  
心理・教育学 \_\_\_\_\_ 河内 十郎  
人文地理学 \_\_\_\_\_ 谷内 達  
人文科学委員会委員長 \_\_\_\_\_ 並木 頼壽  
物理 \_\_\_\_\_ 太田 浩一  
化学 \_\_\_\_\_ 高野穆一郎  
生物 \_\_\_\_\_ 大森 正之  
情報・図形 \_\_\_\_\_ 玉井 哲雄  
宇宙地球 \_\_\_\_\_ 中村 保夫  
相関自然 \_\_\_\_\_ 遠藤 泰樹  
スポーツ・身体運動 \_\_\_\_\_ 福永 哲夫

センターなど

アメリカ研究資料センター  
センター長 \_\_\_\_\_ 大森 彌  
平成11年2月15日まで  
浅野 攝郎  
平成11年2月16日から  
保健センター駒場支所  
支所長 \_\_\_\_\_ 菅野健太郎  
平成10年8月31日まで  
教育用計算機センター駒場支所  
支所長 \_\_\_\_\_ 玉井 哲雄

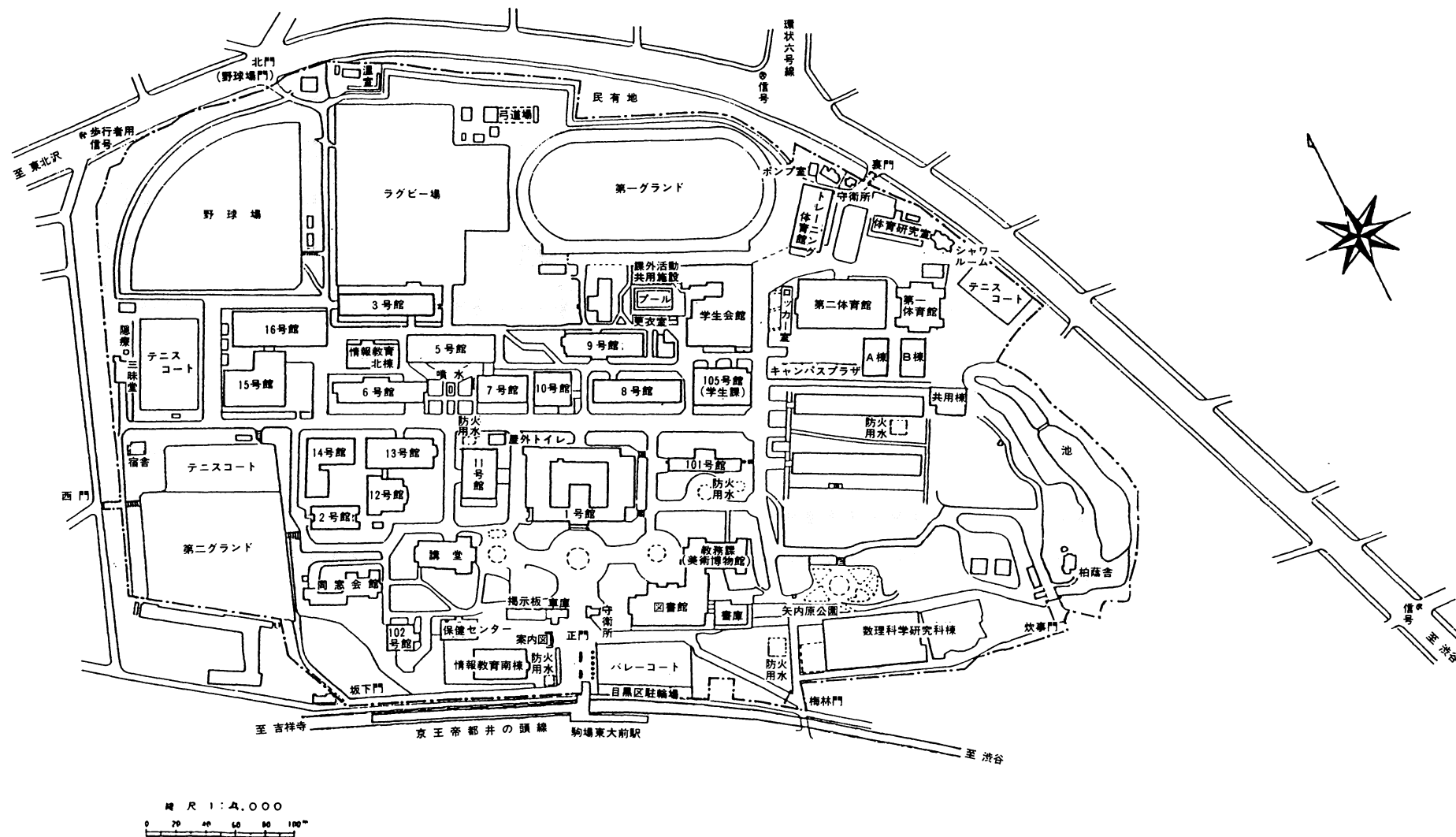
共通技術室  
室長 \_\_\_\_\_ 浅野 攝郎  
平成11年2月15日まで  
浅島 誠  
平成11年2月16日から  
学生相談所  
所長 \_\_\_\_\_ 大森 彌  
平成11年2月15日まで  
浅野 攝郎  
平成11年2月16日から

事務部

事務部長 \_\_\_\_\_ 中村 龍雄  
総務課長 \_\_\_\_\_ 渡邊 隆夫  
経理課長 \_\_\_\_\_ 真取 秀明

教務課長 \_\_\_\_\_ 渡邊 信一  
学生課長 \_\_\_\_\_ 西 顯一  
図書課長 \_\_\_\_\_ 野澤 稔

# 





[駒場]1998 SUPPLEMENT

平成11年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科

研究科長 浅野攝郎

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6001

編集：教育・研究評価委員会

委員長：山本 泰

委員：大堀 俊夫 岡部 雄三

小河 正基 斎藤 文子

柴田 元幸 林 利彦

松下 信之 山口 和紀

吉田 朋広

制作：メディアフロント

〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-9-5-313

TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527

---